

『デカメロン』の遺産＝14世紀後半から 15世紀初頭のイタリア・ノヴェッラに おける額縁・現実性・エロス

米 山 喜 晟*

第一章 『デカメロン』の最も重要な遺産とは何か

すでに私は『デカメロン』について三度にわたって論じてきたが¹⁾、それらを通して私はイタリア・ノヴェッラというジャンルがまさにこの作品によって確立された過程を論証したつもりである。たしかに13世紀の後半に誕生した『ノヴェッリーノ』は、このジャンルの優れた先駆的な作品ではあったが、やはりまだ形成途上という性格からは脱しきれず、しかも形成過程で変遷を重ねているため²⁾、16世紀に今日のような形で完成した際に³⁾、後発の『デカメロン』その他のノヴェッラ集の影響を受けていたことはすでに論じた通りである。今回私は、14世紀後半から15世紀初頭にかけてイタリア語で書かれたいくつかのノヴェッラ集を取り上げて、それらのなかのいかに『デカメロン』の影響が認められ、後世にそうした影響を伝達しているかを具体的に論証して、まさに『デカメロン』こそ、イタリア・ノヴェッラというジャンルの進路を決定した作品であることを再確認

*本学文学部

キーワード：『デカメロン』の遺産、額縁、現実性、エロス、
『デカメロン』影響下の作品

しておくことにする。だがすでに見てきたとおり、『デカメロン』自体あまりにも内容豊富な作品であり、またその影響を受けた作品の数も多数にわたるので、本論で実際にその影響を探る場合には、『デカメロン』の影響の中で最も重要と思われる要素を少数に限定し、散文作品もボッカッチョの死後間もない時代の代表的な作品に限定して検討せざるを得ない。

そこでこの論証を進めるためには、まず『デカメロン』がイタリア・ノヴェッラに残した最も重要な影響を3点にしぼった場合それは何か、という問題を検討したい。そのためには、ここで改めてノヴェッラとは何かという定義を改めて再確認しておく必要があるだろう。すでに私はそうした定義を3種類紹介したが⁴⁾、最近アメリカで刊行された『イタリア文学百科事典』で、その一つであるセグレの定義がほとんどそのまま取り上げられているのを見た⁵⁾。この定義はあまり厳格に適用すると、現存するノヴェッラの最も興味深い部分を排除する危険を感じさせはするものの⁶⁾、機械的に適用してはならないという留保付きで、ノヴェッラの本質を最も鋭く捉えた定義であることを認めざるを得ないであろう。その内容を『百科事典』から直訳すると、「それは（レー、ファブリヨ、またはロマンスとは違って）散文による短い叙述で、（イソップ物語とは違って）人間を登場人物とし、（お伽噺とは違って）その粗筋は信じられる領域で起こっており、しかし（歴史、年代記、逸話とは違って）通常史実には基づいておらず、（聖人伝、エクセンプラ、寓話、説教とは違って）一般的に明確な道徳的結論を避けている。最後にノヴェッラはしばしば、額縁的虚構または何らかの別のそれらをまとめる枠組の中にまとめられている」⁷⁾となっている。末尾の「最後に……」以下の部分だけは、セグレの定義にはなく、その代わりセグレは、上述のノヴェッラの定義の後に、各々のノヴェッラは「口承／書承」、「道具化／発想の自由」、「枠組または額縁への編入／自立」などの二者択一という形で実現される、という但し書きを付けて

いる⁸⁾。

上述の『百科事典』の定義は、1. 散文、2. 短編、3. 人間、4. 現実性、5. 虚構性、6. 教訓なし、7. (しばしば) 額縁または枠組付き、という7点に要約できるのだが、その内の1. 2. 3. の3点は、当時の散文作品のごく基本的な条件であって、特に『デカメロン』の出現がもたらしたものと見なすべきものではない。それに対して7. とりわけ『デカメロン』式額縁は、ノヴェッラ全体にとっては絶対的な条件ではないものの、『デカメロン』の成立にとっては不可欠な発明であったことは、私がすでに論証したとおりである⁹⁾。また引き続いて論じるとおり、後代のノヴェッラ集においても再三再四利用され続けたので¹⁰⁾、まさに『デカメロン』の最も重要な遺産の一つと見なすことができるであろう。

それでは先の定義の内、残された4. 5. 6. という要素はどうであろうか。これら3つの要素は、『デカメロン』の第一日目の序文で、ペストに襲われたフィレンツェから7人の婦人と3人の紳士が召使たちを引き連れて郊外の別荘に逃れ、最年長の婦人パンピネアの提案で気晴らしのために交互に物語を語ることになったことと、男性を代表するパンフィロが第一日目の冒頭の作品で、プラートの商人チャッペレットが嘘についてブルゴーニュの修道士たちを騙し、聖人や奇跡に対する当時の人々の素朴な信仰の裏をかいて、まんまと聖人として祭られるという、極めて現実的で史実とも教訓とも無縁な話を語り、その話が女性たちによって「一部は笑われ、全体は称賛され」¹¹⁾ という形で是認されたために、その後続く全作品の基調を形成することとなり、この作品に定着することになった。まず5. に関しては、創造力豊かな三十代半ばのボッカッチョにとって、史実そのままの叙述は退屈過ぎたはずで、『デカメロン』の作品自体がそのままお手本としての機能を果している。残る4. 6. に関しては、『デカメロン』にも魔法や奇跡などの類いの超現実的な出来事が全く出てこな

いわけではないが、それらは語り手の口を通して、いつ、どこで、どのように生じたかがはっきりと語られていて、そうした出来事と語り手たちの世界との間には明確な一線が引かれているので、両者が交じり合うことはなく、語り手たちの世界は基本的に魔法や超自然的な出来事から無縁な世界となっている。こうした出来事が少数であることと、その明確に限定された語られ方とによって、『デカメロン』はこの時代においてはおそらく例外的なほど、現実的な世界の出来事を扱った作品となっている。おそらく『デカメロン』がイタリア・ノヴェッラに与えた最も重要な影響の一つは、まさにこの現実性だった、と見なすことができるだろう。ところがここで極めて興味深いことは、後に示すとおり『デカメロン』以前のボッカッチョの創作作品が、ごく例外的な伝記の類いを除いて、全部現実世界から遊離した超現実的な世界を舞台にしていた、という事実である。『デカメロン』以前のボッカッチョは、現実性の使徒では全くなかったのである。一体こうした転換はいかにして生じたのか、少し後戻りになるが重大な事柄なので、本論の第三章をそのことに当てたい。

作品が扱う具体的な内容に関しても、『デカメロン』は様々な形でその後の作品に影響を及ぼし続けているが、特に代表的なモチーフと言えば、まず悪戯（いたずら）又は欺瞞と訳されるベッファ¹²⁾、続いてエロス¹³⁾、当意即妙の返事¹⁴⁾、運命の変転¹⁵⁾、悲恋¹⁶⁾、気前の良さ¹⁷⁾等々と続く。本論では紙数が限られているので、従来まともに扱われて来なかった感のあるエロスに問題を限定して、『デカメロン』の影響を探ることにする。

『デカメロン』の影響下で生まれた作品をも限定する必要がある。デイ・フランチャはその著書『イタリアの文学ジャンルの歴史 ノヴェッリスティカ（ノヴェッラ概説）』¹⁸⁾の第三章に「ボッカッチョの模倣者たち（エピーゴニ）」というタイトルを付けて、ヤコポ・パッサヴァンティ以下、フィリッポ・デッリ・アガツァーリ、ポーノ・ストッパーニ、ジョヴァ

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

ンニ・フィオレンティーノ、ジョヴァンニ・セルカンビ、フランコ・サッケッティ¹⁹⁾らの作品とともに、『シチリアの冒険家』²⁰⁾その他多数の作者不明の作品を紹介している。この章では創作年代も不明な手稿のままの作品も紹介され、またディ・フランチャ自身がボッカッチョの最も雄弁で価値ある敵対者だと認めるパッサヴァンティの『『デカメロン』の完璧なアンティテーゼ』、『真の改悛の鑑』なども含まれているので、必ずしも第三章のタイトル通り、ボッカッチョの模倣者だけが論じられているわけではない。すでに石坂氏の翻訳²¹⁾を通して見たとおり、パッサヴァンティの作品は、『デカメロン』同様ベストの衝撃の下で、ほとんど同時進行的に生まれたもので、『デカメロン』の成立以後にその影響の下で生まれたと見なすわけにはいかない。アガツァーリの『奇跡と範例（ミラーコリ エアッセンプリ）』²²⁾やストッパーニの『道徳を説く寓話集（ファーヴォレ・モラリッザーテ）』²³⁾もそのタイトルからして教化本の系統であり、上述のノヴェッラの定義4. および6. と明らかに抵触するもので、本論の趣旨には合わないものと見なし得る。また創作年代や作者不明の作品まで扱う余裕はないので、本論では結局セル・ジョヴァンニ・フィオレンティーノの『ペコロネ』²⁴⁾、ジョヴァンニ・セルカンビの『ノヴェッリエーレ』²⁵⁾、フランコ・サッケッティの『三百話』²⁶⁾の3作品に限定して、それらの作品における『デカメロン』の影響を検証しておきたい。

第二章 『デカメロン』式額縁の模倣

作者セル・ジョヴァンニ・フィオレンティーノ自身の証言によって¹⁾、1378年のフォルリーへの政治的亡命中に書かれたとされている『ペコロネ』の場合、外部で進行する物語を伴わない設定の中で2人の語り手が交互にノヴェッラを話し合う一種の『デカメロン』式額縁が見られるので、ディ・フランチャがその著書の第三章のタイトルで呼んだ通り²⁾、この作

者をボッカッチョのエピゴーネンと見なして不都合な理由は何もない。『デカメロン』以前には、『七賢人の書』に代表される入れ子式額縁はいくつも存在していたが、『デカメロン』式額縁には前例がなく、したがって『デカメロン』式額縁がボッカッチョ自身の発明であったことはすでに私が論じた³⁾通りだが、もしもその主張が正しければ、『ペコローネ』の額縁は、作者が新しく発明したものではなくて、当然作者が読んでいたことが確実な『デカメロン』を模倣したものと見なされるべきである。

ただしそこでは額縁を組み立てる素材として、ペスト大流行ではなく、フィレンツェ生まれの青年アウレットの恋のエピソードが用いられている。すなわちフォルリーという町に、サトゥルニーナという美しい女子修道院長がいて、10人の修道女と徳高い修道生活を営んでいた。その噂を聞いて彼女に恋したアウレットは、自分も修道士となってフォルリーに赴き、礼拝堂付き司祭として女子修道院に住み込み、やがてサトゥルニーナもアウレット修道士を愛し始める。こうして二人は毎日一度人目を避けて夜中に出会い、互いに短い話を一話ずつ話すことに決め、25夜にわたって50話が語られることになる⁴⁾。

以上の額縁のエピソードから真っ先に連想されるのは、農夫が唾に化けて女子修道院に住み込み、修道女たちの欲望が強すぎるために口を利用してしまい、院長によって奇跡だと祝福された『デカメロン』のⅢ-1という作品である。実際ここでは『デカメロン』の額縁の持っていた甘美さを、欲張ってさらに凝縮させたような額縁が試みられている。すなわち『デカメロン』では7人の若い婦人と3人の紳士から成り立っていた語り手が、若い男女一人ずつとなっていて、夜な夜な密会して語り合っているからである。しかしその後さらなる発展を期待すると、期待外れに終わる。私たちはすでに『デカメロン』の額縁の中で、若い男女が極めて敬虔で徳高い生活を送っていたのを見たが、『ペコローネ』の額縁の中で密会してい

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

る若い男女も、修道院内だから当然と言えば当然だとは言え、それに勝るとも劣らぬ、敬虔で徳高い生活を送り続け、ただ最後の夜にだけ何度か抱き合って口づけを交わしてやさしい言葉を掛け合うが、「しかし何ひとつ不正な行いはなく」⁵⁾、楽しいおしゃべりが終わると二人は幸せに別れて行った、とされているからである。

大体この作品は、額縁のみならずノヴェッラそのものにおいても、読者に肩透かしを食らわしている。当初はまさにノヴェッラと呼ぶにふさわしいエロスにあふれた話が続き、第四日目の冒頭ではサトゥルニーナが自ら「ノヴェッラの女王」と呼び、アウレットもそれを認めた⁶⁾ シェークスピアの『ヴェニス商人』のモデルと見なされている作品を語っており、もしもそのままノヴェッラが語られ続けたならば、文句なしの傑作ノヴェッラ集となったはずだが、第六日目あたりから歴史上のエピソードに偏ってノヴェッラの定義の「5. 虚構性」に違反し始め、第八日目からフィレンツェ史にのめりこみ始め、第九、第十日目では一旦ノヴェッラに戻ったものの、第十一日目からは主にジョヴァンニ・ヴィッラーニの『年代記』⁷⁾に基づいて、フィレンツェ史とそれに関連したローマを中心とする世界の歴史や教会史等、当時史実と見なされていた事柄の叙述を行っている。要するにまともにノヴェッラが語られているのは前半の約三分の一に過ぎず、最後に第二十五日目の第二話でアウレットが語った、修道女に恋して関係を結んだ罰で、死んだルベルトの男根は勃起したまま布団を押し上げ続けて親族を悲しませたというノヴェッラを除いては、大半はヴィッラーニの『年代記』の要約に過ぎない。

何故こういう脱線が生じたかについては、二つの理由が考えられる。一つはいくら『デカメロン』式額縁を設定しても、創造力が十分でなければノヴェッラ集は完成し得ない、というごく平凡な事実である。当然と言えば当然な理由で、16世紀にはフィレンツェの『愛についての談義』⁸⁾

やグラッツィーニ、通称ラスカ（うぐい）の『晩餐』⁹⁾を始め未完のノヴェッラ集がごろごろしていることから、結構創造力豊かな作家といえども設定した額縁全体をノヴェッラで埋めることは楽ではなかったことが分かる。ポッカッチョ本人ですら、『デカメロン』第十日では若いころ書いた作品を再利用している¹⁰⁾。したがって、セル・ジョヴァンニが十数篇で行き詰まったとしても、けっして意外ではない。

しかしセル・ジョヴァンニの場合には、もう一つの理由が考えられる。それはすでに記した本人の証言に従うならば、作者が1374年政治亡命中にこの作品を書いていることで、まさにそれはアルビッツィ派對リッチ派の激化した党争への対策として、共和国政府が嚴罰をもって臨み、おも立った家族やその取り巻きが処罰され追放されていた時代のことだったと考えられることである¹¹⁾。作者が作品の途中からフィレンツェの歴史の要約に転換し、全体の三分の二弱が広義のフィレンツェ史に変質している理由は、亡命という非常事態によって自派を正当化する必要が生じたために、フィレンツェ史を要約して提示するのを感じた結果だと見なすことも可能であろう。その場合にはノヴェッラの部分は一種のアトラクションで、後半の部分こそ執筆の真の動機だということになるであろう。だがおそらくそうした解釈は考え過ぎで、ノヴェッラの創作が行き詰まったことと、当時の作者の主要な関心事とが複合的に作用して、こうした奇妙な逸脱をもたらしたと見るのが妥当な解釈ではないかと思われる。

デイ・フランチャはサッケッティをセルカンビの後で論じたが¹²⁾、実際にはこの作品はサッケッティの晩年に当たる1390年代に完成されたと思なされていて、後に見るとおりセルカンビの作品よりも先に書かれたことが確実なので、サッケッティの『三百話』を先に取り上げる。この作品には額縁はなく、かつて私が「枠組」の一部として「外枠」に分類した「序文（proemio）」がついているだけである。それもほんの2ページ程度の短い

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

もので、そこでは近年の戦争や疫病による不幸の中で笑いが求められていることや、ボッカッチョの傑作が大評判を得てフランス語や英語に訳されていることなどに触れ、「自分もこの作品を書いて古今のノヴェッラを集めることにした」¹³⁾と宣言する。この作品のノヴェッラの4割はフィレンツェを舞台にしたものだが、それ以外の作品も多数含み¹⁴⁾、人間も男女とも大貴族から庶民まであらゆる階層に互る。ダンテは人を誉める時は自分が語り、けなすときは他人（の霊）に語らせたが、自分もそれに習いたい。気に入らぬ話を聞くと人は作り事だと言うが、自分はそれを真実として創作するよう工夫したい。人物の名前は変えてあっても、そのノヴェッラが無い方がましなわけではあるまい……というはなはだ取り留めないコメントの途中で序文が中断している。勿論こんな短文が完成されなかったはずはないので、以下の部分は他の多くの部分同様埋滅したのであろう。サツケッティは自作では額縁の必要を認めなかったが、ここでダンテが他人（の霊）の口を通して語らせたことを指摘して、額縁の「他人性」の効果を察知していたことを示している¹⁵⁾。

もう少し具体的に『三百話』の欠落ぶりを示すと、序文で見たような部分的な欠落が随所に見られることに加えて、（確実な証拠が示されたことはないようだが）当初300篇書かれていた（そのために『三百話』Trecentonovelle という標題が付けられた）はずのノヴェッラの内、なんと78編が埋滅し、さらに数編にはほんの断片しか残っていない¹⁶⁾。もしもこの作品に何らかのしかるべき額縁がついていたら、これほどひどい埋滅は生じていなかったかも知れないが、こうした欠落の最大の原因は、サツケッティが赴任先でベストで死去したため、『三百話』の草稿を含めて彼の遺品が完全な形で祖国に戻されなかったことによるものと思われる¹⁷⁾。そうした状況を考えれば、今日残されている作品ですら、奇跡的に残っているという感がする。この作品に額縁が付いていない最大の原因は、おそ

らく額縁という虚構を用いてそれぞれの作品が語られた経緯を示すには、各々のノヴェッラが短かすぎたためではないかと思われる¹⁸⁾。だから作品そのものの中で、額縁にあたる記述が行われている場合が時折見られる¹⁹⁾。私は前の論文で『デカメロン』の額縁の効果ばかり強調したが、それには長所ばかりではなく、無視し得ない欠点があった。それは始めに語り手を設定して、同一人物に反復して語らせるという単純な構成のために、額縁の部分の記述が総じて単調で退屈な繰り返しに陥り易いことである。『デカメロン』にもすでにその弊害はある程度感じられたが、ボッカッチョはその中に歌や踊りや散歩を取り入れたり、弁明や主張を行うことで極力その弊害を押えようと工夫している。当時の読者の五感は、その部分の歌や踊りを、今日の私たちには想像出来ないほど鮮明な旋律や伴奏付き²⁰⁾で享受していたことをも、忘れてはならないであろう。『デカメロン』式額縁を完成させるのに必要なそうした記述が、『三百話』のほとんどを占める短い笑い話のためにはおよそ無駄な作業だと見なされても当然である。家柄の点でも市民としての経歴もボッカッチョよりも格段に優れたサッケッティは²¹⁾、ボッカッチョの業績を客観的に評価しつつも盲目的に模倣しなだけの見識が備わっていた²²⁾。しかも次章で記すような『デカメロン』ブームを体験したフィレンツェでは、散文を話すように書くことはすでに自明のこととなっていて、そのために今更額縁を作る必要はなかったのである。自分の創作に『デカメロン』とは全く異なった魅力があることを確信していたサッケッティは、『デカメロン』を評価しつつも自作では額縁を避けたのである。だからサッケッティをボッカッチョの単なるエピゴーネンと見なすわけにはいかない。

他方フィレンツェより遅れた都市ルッカの人、ジョヴァンニ・セルカンビは、その『ノヴェツリエーレ』において²³⁾、『ペコローネ』以上に露骨な『デカメロン』の額縁の模倣を行っている。すなわちその序文で、1374

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

年のルッカはペストに襲われたために、一団の男女が司祭とともに空気が澄むまでイタリア各地を巡礼する計画を立てたことが語られる。まずアルイジ Aluizi が団長に選ばれ、人々はお金を出しあって3000フィオーリーノを集め、一同は夫婦といえども男女の交わりを断ち、不正を行わないことを誓い合う。団長は会計係と男女別々に世話する世話係たちを任命し、司祭にはミサや礼拝の指導を、また才能ある者に歌、踊り、楽器、剣技などで食事時その他で仲間を楽しませることを依頼した。そして最後に、「ゆえなくして多くの侮辱に耐える者、また何の罪もないのに彼に対して多くの侮辱がなされた者」²⁴⁾、すなわちセルカンピ自身に対して、旅行の参加者のために語られる「物語の作者 (autore)」およびその意味ははっきりしないが、「この本の作り手 (fattore di questo libro)」となることを依頼し、Giovanni Sercambi という作者の名前の各アルファベットを各行の始めに用いた、2行のコーダ付きのソネットを披露した²⁵⁾。一同はこの提案を了解し、イタリア各地の巡礼中に、他の娯楽を楽しむとともにセルカンピのノヴェツラを聞くことになった。こうした額縁のおかげで、簡単なイタリア一周の旅行記とともに、全155篇に及ぶノヴェツラが語られたが、末尾は欠落して完成していない²⁶⁾。

この作品がいつ書かれたかについては確証できないが、少なくとも額縁で言及されているペストの年、1374年よりもはるかに遅く、おそらく1400年以後のことだと見なされている²⁷⁾。実際、「ゆえなくして……」という泣き言めいた自分自身への言及は、当時ゴンファロニエーレという軍隊を動員させることが可能な要職にあつて協力（あるいはむしろ指揮）したため、後世まで彼の名に「民主的自由の敵」²⁸⁾という烙印を押されることになった（しかしそのお陰で死去した時には国葬で葬られた²⁹⁾、1400年10月13日の軍事クーデターとは無関係では有り得ない。勿論個々のノヴェツラ自体はずっと早い時期から書き溜められていた可能性が高いが³⁰⁾、少な

くともこの額縁が書かれたのが、1400年の末以後であることは確実であり、おそらく作品自体はその後いくらかの時間が経過して、一応体制が安定した時期に完成されたと思えるのが妥当であろう。ガイネージ家のクーデターは、ガイネージ家が抜群の力を得たから発生したのではなく、フォルテグェッラ家に率いられた敵の党派が力をつけてきていた際に、当主のラツザロ・ガイネージを弟アントニオが暗殺し、そのアントニオが処刑された結果従来の支配体制が崩壊の危機に瀕したために発生したものである。これまで偽装してきた民主制の維持は困難と見たガイネージ家とその与党が、当時24歳だったパオロを擁立して大権委員会を招集し、市の独裁権を掌握して敵の党派を殺戮または追放してガイネージ家をルッカの領主の地位に付けたのであった³¹⁾。

ガイネージ家独裁体制成立の最大の功労者だったにもかかわらずそれ相應の待遇を受けていないという不満が、セルカンビに先に記した泣き言を言わせ、『ガイネージ家の諸君に与える覚え書き』³²⁾や友情をめぐる数編のノヴェッラ³³⁾を書かせたものようである。額縁に登場してりっぱに団長をつとめ、セルカンビを「作者」に任命した人物アルイジのモデルは、ガイネージ家にとってメディチ家におけるコジモ・デ・メディチのような存在で、ガイネージ家の党派が市の主導権を握る原動力となったフランチェスコ・ガイネージ³⁴⁾だったと言われている。薬屋³⁵⁾を家業とする野心的な若い政治家セルカンビは、この人物に引き立てられて、ガイネージ体制の中で出世し、共和国の大統領に当たるゴンファロニューレにまで上り詰めたのだが、現在のガイネージ家の当主で同時にルッカ領主である若いパオロとその取り巻きへの不満や、ガイネージ家にはフランチェスコに勝るリーダーは生まれなかったという確信がこの懐古的な額縁を作らせたとする推察は、それほど的外れではあるまい。

この作品に対するイタリア人たちの評価に関してはすでに何度も紹介し

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

だが、一言でいうと酷評されている。たとえば14世紀文学の権威N. サペーニョは、「(ペコロネと比較した場合) はるかに表現力が劣り、粗野で、いく分不器用なのがセルカンビで、彼においてまずボッカッチョの世界の最も外面的で、単なる内容的側面へのあの墮落（それはその後の2世紀間により公然と進められるだろう）が実現されるのだが、その場合にしばしばつきまとうのは鈍重な趣向であって、好色や卑猥から詩的に解き放たれることは全くない³⁶⁾とまさしく顰蹙している。そうした表現上の不満に加えて、近代イタリアのアカデミズムを憤慨させているのは、臆面もない数々の剽窃である。たとえば額縁においても、ペストを逃れての集団の旅という主題を借りているだけではなく、その道中に関する記述はファツィオ・デッリ・ウベルティ³⁷⁾の地理の長詩『ディッタモンド』³⁸⁾に全面的に依存し、額縁でしばしば歌われるカンツォーネの類は、ボッカッチョや14世紀の人気作詞家ニコロ・ソルダニエーリ³⁹⁾をそのまま借用したものであった。当然ノヴェッラそのものも借り物が多くて、たとえば全155篇の内で24篇（15.48%）が『デカメロン』からの剽窃である⁴⁰⁾。しかしそれと同時に、この作品の当時収集された資料としての価値は貴重であり、文学作品としてはともかく、読み物としては部分的に『デカメロン』に勝るとも劣らぬ興味深いものを含み、ヨーロッパで最古の民話的作品⁴¹⁾も含めて、この時代を証言する他には類のない物語を含んでいることも否定できない⁴²⁾。

ところですでに見たとおり、サッケッティを除く二人の作者は、『デカメロン』から額縁の利用を学んで模倣したが、二人とも「話すように書く」という「口承性」と、作品をまとめるための「全体性」と「反復性」の基盤としてのみ額縁を利用しただけだった。『デカメロン』ではあれほど効果を挙げた「他人性」、「複数性」その他の特性はほとんど活用されていない。大体セルカンビのように自己中心的で他人の思惑など頓着しない人間

には、「他人性」によって自らの羞恥心を回避する必要など全然なかったようである。

第三章 超現実から現実へ——『デカメロン』における世界の転換

第一章で見たノヴェッラの定義の内、「(お伽噺とは違って) その粗筋は信じられる領域で起こっており」という部分を、私は「4. 現実性」ということばに集約し、『デカメロン』の最も重要な遺産の一つと見なすことにした。事実『デカメロン』では、通常この現実世界に起こりそうな事柄が語られ、ごく例外的に魔法や超自然的な出来事が扱われる場合でも、日常的な空間から切り離された出来事として、時間的、空間的にはっきりと限定しながら叙述されている。またこの現実性という特性は、定義5. 虚構性や、同6. 教訓なし、とも深く関連している。歴史や年代記の類いのように過去に題材を取ると、当然怪異や奇譚の比重が高くなり、結果的に現実性は軽視されるはずだし、教訓付きの物語は奇跡や予言や彼岸の世界との交流を抜きにしては語れないからである。まさにこの作品に顕著に認められる現実性という特性こそ、『デカメロン』を『真の改悛の鑑』のような当時のイタリアの多くの散文からはっきりと切り離し、ノヴェッラというジャンルを確立させた最大の要件だと見なすことが可能だろう。

ところがこの点で極めて興味深いことは、本来ボッカッチョはこうした現実性を重んじる詩人・文学者では全くなかった、という事実である。たとえば『デカメロン』の時間的空間的世界と、長編詩の第一作『ディアナの狩り』¹⁾のそれとの違いは余りにも明らかである。そこでは一応現実に存在するナポリとその周辺が舞台に選ばれ、ナポリに生存する貴夫人たちやボッカッチョ自身を含む若者たちが登場するものの、彼女らを狩りに導くのは月の処女神ディアナである。狩りの後、貴夫人たちはディアナと別れて愛の女神ヴェネレ(ヴィーナス)に従う。するとヴェネレの登場と同

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

時に殺された獣たちは復活して若者に変身し、自分を獲物にした貴夫人に仕えることで結末を迎える。ボッカッチョ自身も鹿から人間に戻って恋人に奉仕する。その幕切れは鮮やかで、若き日のボッカッチョの才気を証明した傑作だが、女神たちが登場し、死んだ獣が生き返り、獣が人間に変身するとなると、その世界は現実のナポリではなく、超現実的な世界であることが明らかである。

第二作とされている長篇の散文『フィローコロ』²⁾については、額縁以前の試行錯誤として作られた設定Aと設定Bに関連して何度も触れたが、要するにフランス文学『フロワールとブランシュフロール』³⁾の翻案として生まれたものの、その時代はボッカッチョの好みに合わせて変更されており、イスラム教が現れる以前の古代末期のスペインと地中海世界およびローマやナポリが舞台とされている。もしも原作通りの時代設定⁴⁾に従っていれば、中世における西欧文明とイスラム文明との接点を舞台にしているので、かなり『デカメロン』の世界とも重なったはずだが、ボッカッチョはその時代を古代末期に繰り上げて、イスラム文明との対決を避けている。それどころか、作品中の戦闘の場面にペローナの女神を登場させたり、何度か異教の神々に登場人物を助けさせたりしており⁵⁾、その舞台は現実世界から隔絶している。スペインの王国が国を挙げてキリスト教に改宗するという末尾のエピソードは、原作のイスラム国家の改宗ほどアクチュアルな意味を持たず、しかも何度も異教の神々の助けを受けているそれ以前の部分とは明らかに矛盾している。

『フィロストラート』⁶⁾となると、時間的にも空間的にもさらに遠ざけられ、落城前後のトロイに舞台が設定されていて、まさに異教の神々が登場するホメーロスの世界とつながっている。事実失恋して自暴自棄になった主人公は、何人ものギリシャ人を殺して英雄アキレウスに殺されてしまう。実はこの作品はボッカッチョのオリジナルではなくて、前作同様フラ

ンス文学の翻案であり、ボッカッチョがフィアンメッタのために12世紀フランスの学僧ブノワ・ド・サントモールの『トロイ物語』⁷⁾のグイド・デッレ・コロネによるラテン語訳⁸⁾を、さらにイタリア語に翻案したものだと思われている。

初期のボッカッチョがこうした古代の異教の神話的世界を好んで描こうとしていたことは、それに続く『テセイダ』⁹⁾によって明らかである。フィレンツェ帰国の少し前に書かれたこの作品は、フィアンメッタの求めに応じて書かれたとされているが、アテネ王テセウスの捕虜となった二人のテーベ人アルチタとパレモーネによる、アマゾン族の女王でテセウスの妃であるイポリタの妹エミリアへの恋と決闘を描いたもので、結局決闘に勝ったアルチタが死んで、パレモーネとエミリアが結ばれる。あの半人半牛の怪物ミノタウロスを殺したテセウスのアテネの王宮の出来事だから、時代設定そのものが神話時代に属していて、当然神々が直接干渉に乗り出す超現実的な世界がその舞台である。

帰国後第一作の『アメート』¹⁰⁾では、ボッカッチョはフィレンツェの郊外を舞台に取り、自分の分身らしき人物を二人も登場させている。だからと言って現実性が強まっているわけではない。第一に登場する女性たちはニンフである。彼女たちにはモデルが実在し、その貴夫人たちの名前も一応推定されている¹¹⁾ようだが、作品中ではあくまで牧場で戯れるニンフである。語られている出来事にはアレゴリーが交錯し、雰囲気はキリスト教化されているものの、美の女神ヴェネレ自らが登場しているのも、その世界は基本的に田園詩につながる古代的神話の世界として設定されていると思なざるを得ない。

それに続く『愛の幻影 (アモローザ・ヴィジオーネ)』¹²⁾は、その題名通り、まさに幻影の世界が舞台となっている。詩人が砂漠の境界をさまよっていると城に到着し、二つの門があるので広き門から入り、城内で過去の

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

人物のパレードを見た後、大理石で運命の勝利を表した第二室で美しい女たちの中に（フィアンメッタらしい）ニンファ・シークラの姿を見て歓喜して……という作品の世界は、やはり現実性とはほど遠い。三行詩50節で未完のまま残されたこの作品は、『アメート』の田園とも異なった、『神曲』や『薔薇物語』の影響が顕著なアレゴリーの世界であり、ボッカッチョ本人らしき詩人が迷いこんでいるとはいえ、『デカメロン』の日常世界とはまさしく異次元に存在している。

おそらくこうした作品中で最も完成度が高いと思われるのが、ボッカッチョの三十代の前半、1344年から46年に書かれたと推定されている『フィエゾレのニンフ物語（ニンファール・フィエゾラーレ）』¹³⁾で、8行詩473節から成る長編詩である。舞台こそフィレンツェに近いフィエゾレの田園が選ばれているが、時代ははるかに遠く、後にフィエゾレの建国者アッタランテの大臣となったジラフォーネの息子の羊飼いやフリコの、メンソラというニンフへの悲恋を描いた作品である。ところがこのアッタランテ王とは、ジョヴァンニ・ヴィッラーニの『年代記』によると、ノエ（ノア）の子ジャフェット（ヤベテ）の子ティッラス（テラス）の子のタグラムの子で、アフリカからトスカーナに移住してフィエゾレを建国した人物と見なされている（ノアの子ハムの子孫とする別の説も併記されているが、その系図では途中にチエロ（天）——サトゥルヌス——ジョーヴェ（ユピテル）などが入り込み、アッタランテをサトゥルヌスの子としてジョーヴェの兄弟だとする荒唐無稽なものである）¹⁴⁾、まさに登場者全員が『創世記』時代の人物である。当然アフリコもメンソラもその時代に生きていて、しかもメンソラは『アメート』の中のニンフのように貴夫人のに仮面を付けたような曖昧な存在ではなく、ディアナに仕える正真正銘のニンフであり、当然作品の中に本物の月の女神のディアナが登場して、自分を裏切って出産したメンソラを弓で仕留めている。要するにこれは恋が成就し

なかったために川に投身した男と、ディアナによって川に変えられたニンフから、アルノ川の支流アフリコ川とメンソラ川の地名が生まれた経緯を歌った作品で、神話時代の田園が舞台となっている。

『デカメロン』以前の作品でもう一つ忘れてはならないのは、「最初の近代的でリアリスティックな心理小説」¹⁵⁾と評価されることもある『マドンナ・フィアンメッタの悲歌』¹⁶⁾という散文の作品である。この作品に関しては執筆年齢を推定させる「正確な資料が皆無」¹⁷⁾なので、諸般の事情や作品中の文体や語法の成熟度から勘案して、ブランカ博士は1343年から44年ごろに書かれたらしいと推定している¹⁸⁾。もしその推定が正しければ、先に見た『フィエゾレのニンフ物語』とほぼ同じころか、むしろそれよりも早く完成したことになる。前述したようにその近代性を強調した評価を受けていて、散文で書かれており、ポッカッチョの恋人と見なされるフィアンメッタを主人公としていて、当然同時代のナポリが舞台に選ばれている。こうした条件に基づいて、この作品では『デカメロン』に近い現実的な時空世界が設定されているものと期待されても無理はなく、たしかにその世界は、他の作品に比べるとかなり『デカメロン』の世界に近づいているとも言えるかも知れない。しかしこの作品においてさえ、ポッカッチョは超現実的な存在を登場させているのである。すなわちその第一章で、見知らぬ青年に一目ぼれした後、乳母から厳しい忠告を受けて一人寝室で悩んでいるフィアンメッタの許に、どこからともなく美しい貴夫人が現れて話し始める、という場面がそれである。これは『哲学の慰め』¹⁹⁾の哲学の登場に似た場面であり、フィアンメッタはその婦人が語る息子の弓矢の力の自慢話から、てっきり相手は愛の女神ヴェネレだと信じこみ、その勧めに従って恋を続ける決心をする。しかし後に彼女は、自分の恋の不幸な成り行きから考えて、その貴夫人が愛の女神ヴェネレではなくて、愛の女神に偽装した復讐の女神ティシフォーネ²⁰⁾だったらしい、と推測し直している。

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

愛の女神であれ復讐の女神であれ、とにかくその婦人が超現実的な存在だったことは確かであり、したがって少なくともこの章においては、主人公フィアンメッタの世界が、女神ディアナがナポリの貴婦人たちを率いて狩りに行く『ディアナの狩り』の世界と同質の時空世界だったことは明らかである。要するにこの作品の一連の事件は、同時代の出来事だとされているものの、『ディアナの狩り』や『アメート』の場合と同様、やはりヴェネレやティシフォーネが登場する超現実的な世界の出来事であり、その世界は現実のフィレンツェから歩いて行ける『デカメロン』の世界からは隔絶した、超現実的な世界だったのである。

ボッカッチョが『デカメロン』の執筆以前に行った創作活動は、ラテン語で書かれた初期の習作や『リーメ（叙情詩集）』²¹⁾や『書簡』²²⁾を除くと、上述の8作品にラテン語で書かれた対話体の詩集『エグローゲ』別題『田園の歌』²³⁾、およびイタリア語で書かれた『ダンテの生涯』別題『ダンテ賛美論』²⁴⁾というタイトルの論文を加えたものが大体そのすべてらしい。『エグローゲ』の場合第一篇『ガッラ』から第16篇『アッゲロス』まで、様々な男女が現れてラテン語の韻文で対話を交わしている。内容は失恋した男の告白から執筆された当時風雲急を告げていたナポリ王国の情勢に至るまで多岐にわたり、一貫したテーマはない。パンフィロやパンピネアなど『デカメロン』の額縁の仲間と同名の人物が出てくるが、無関係の登場者の方が多いので直接の関係は認め難いようである。田園に住む羊飼いたちの生活を理想化して歌う『エグローゲ』というジャンル²⁵⁾自体、ギリシャのテオクリトス²⁶⁾やローマのウェルギリウス²⁷⁾の傑作以来、ダンテもペトルルカも試みていて、西欧文学における伝統的なジャンルの一つであり、東洋の「帰去来辞」の場合と同様、心労の多い公務や交渉などへの反動として書かれる傾向があるらしい。ボッカッチョは当時フィレンツェの臨時の外交官として、フォルリーの独裁者フランチェスコ・オルデラッフィ²⁸⁾

の許に出入りし、自分の弟アンドレーアを殺したナポリのジョヴァンナ女王に復讐するためにイタリアに攻め込んだハンガリー王ルイージ²⁹⁾のための工作に従事して、フランチェスコをルイージの下に従軍させているのだが、そうした慣れない活動の心労がこの作品を書かせて、ナポリ王国を長年平和に治めたロベルト王を追慕させる³⁰⁾ 動機となっているらしい。当然その世界は、牧人に混じってニンフたちや牧神ファウナが登場する超現実的な神話的田園である。

以上の記述をもう一度整理すると、『ディアナの狩り』では神話化された同時代のナポリ、『フィローコロ』では神話化された古代末期の地中海世界、『フィロストラート』ではトロイ戦争時代の戦場、『テセイダ』ではテセウス王時代のアテネ、『アメート』では神話化されたフィレンツェ郊外、『愛の幻影』では中世的アレゴリーの世界（砂漠、城、庭園、森）、『マドンナ・フィアンメッタの悲歌』ではやはり女神が出没するナポリ、また『フィエーゾレのニンフ物語』では『創世記』時代のフィエーゾレ、『エグローゲ』では牧神（ファウノ）が出没する田園であり、いずれも『デカメロン』のノヴェッラの舞台のような現実の世界ではない。それらの世界の超現実性の程度にはやや差があり、『フィローコロ』や『フィロストラート』のように、フランス文学の原作を下敷きにして翻案した作品は当然原作の影響を受けていて、中世ロマンスの世界の幻想的空間とも重なっている。重要なことは、ボッカッチョが『デカメロン』執筆以前に試みたフィクションの作品にはただの一篇たりとも、純粹に現実の日常世界を舞台に取った作品はなかった、という驚くべき事実である。おそらく『ディアナの狩り』によってナポリ宮廷で絶賛を博したという成功体験がボッカッチョを呪縛していて、超現実的な世界を彷徨させ続けたのだ。

こうした数々の試行錯誤の後に、「1351年の6月以後」³¹⁾の作と推定されているため、年代的には『デカメロン』との前後関係が微妙な『ダンテの

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

生涯』または『ダンテ賛美論』が書かれている。この作品においてのみ、13～4世紀の現実のフィレンツェとイタリアおよびその周辺が、その舞台となっているのである。ただしこれはあくまで今日でいうノン・フィクションとして書かれており、フィクションの『デカメロン』とは異質な作品であることは言うまでもない。ところが『デカメロン』の創作において、虚構としてではあるが、ボッカッチョはおそらくヨーロッパ文学史上類を見ないほど大規模な現実世界の把握を試みていて、極めて例外的に魔法や超現実的な出来事を描いている場合には、必ず語り手の口を通して、特殊な状況や異能の人の存在などというその特異さに関して意識的な説明を加えており、たとえば『マドンナ・フィアンメッタの悲歌』の第一章で見られたように、復讐の女神という超現実的な存在が、不意に何の説明もなく登場するなどという事態は決して起こらない。つまりボッカッチョは『デカメロン』の創作において、それ以前の彼の虚構作品では普通に見られた神話化された世界やアレゴリー的空間などといった超現実的な世界から、現実的な世界へと完璧な舞台の転換を行っているのである。『デカメロン』式額縁の設定は、こうした舞台の転換にとって不可欠な装置であったことは言うまでもない。この場合ベストの惨状から逃れて市外に避難した10人の男女こそ、お互いに忌憚のない目でチェックし合う現実性の支え手として機能していたのであった。

この転換に関して特に注目されるのは、『ダンテの生涯』という作品である。先にあげた年代推定からも分かる通り、完成された時期が『デカメロン』の後という可能性は高いが、少なくともその執筆のための準備が『デカメロン』の成立に先行し、影響を及ぼしていることは疑いの余地がない。ボッカッチョはベストの前年にフォルリーの独裁者オルデラッフィを訪問する前、ラヴェンナに滞在してダンテの墓を詣でている³²⁾。もちろんその際に晩年のダンテの消息を調べていて、その結果は作品の一部とな

っている³³⁾。またボッカッチョは、ペトルルカと違って若年よりダンテを崇拜しその作品に親しんできたとされている³⁴⁾が、伝記執筆に際してそれらの作品を改めて読み返しているはずである。『神曲』そのものは、死後の世界という超現実的な世界を舞台にしているが、表現はあくまで緻密でリアルであり、ボッカッチョの現実的な世界への回帰にとってプラスに作用したことに疑問の余地はない。アウエルバッハは『ミメーシス』において、「『神曲』が存在しなければ『デカメロン』は書かれなかったであろう³⁵⁾」と記しているが、『デカメロン』における現実的世界への回帰がこれほど見事に成功した理由の一つは、フィレンツェ帰国後の一時期、ボッカッチョがダンテを深く読みこんだことにある、と見なすことができる。さらにボッカッチョは、ダンテが生きた時代を知るために、ジョヴァンニ・ヴィッラーニやディーノ・コンパーニ³⁶⁾たちの年代記類をも読んでいるはずである。またダンテが属していた清新体派の人々の詩をも読み直したに違いない。当時世界的な名声を得ていたダンテが生きていた世界は、そのまま『デカメロン』の舞台と重なり合っていたのである。実際『デカメロン』には、ダンテが属していた清新体派のリーダーのグイド・カヴァルカンティ³⁷⁾（VI-9）や、同時代のもう一人の天才ジョット³⁸⁾を主人公とした作品（VI-5）が見られるのである。このようにボッカッチョが『ダンテの生涯』を執筆するために行った様々な準備が、『デカメロン』執筆の際にボッカッチョに決定的な影響を及ぼしたものと思われる。

『デカメロン』以前のボッカッチョの作品に関するもう一つの注目すべき事実は、彼がそれまでノヴェッラを一篇も発表していなかったということである。すでに記したとおり、『フィローコロ』の恋愛評定³⁹⁾に提出されたエピソードを基にして、二つの『デカメロン』の作品（X-4, X-5）が書かれているし、『フィローコロ』の中の悪女たちの告白や、『アメート』で行われているニンフたちの告白の中にも、ノヴェッラに近いもの

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

があるようだが、それらはやはりあくまで「エピソード」や「告白」であって、ノヴェッラそのものではない。それでは一体ボッカッチョはいつからノヴェッラに狙いを定めたのであろうか。その点に関しては残念ながら確実な資料はないようである。たとえそれがいつの時点であるにせよ、一つだけ確実なことは、ボッカッチョがノヴェッラ執筆を企図した際に、当時はまだ今日の形に向けて完成途上にあつた、『ノヴェッリーノ』からヒントを得ていたということである。すでに見た通り、ボッカッチョはダンテの伝記を準備していたところに、フィレンツェの様々な文献を読み直したものと思われるので、その際に『ノヴェッリーノ』を改めて読み直し、新しいノヴェッラ集を構想したということは十分に考えられる。ボッカッチョが実際に『デカメロン』を執筆した時期は、ブランカ博士によって「1349年と1351年の間」⁴⁰⁾と推定されていて、パドアンは論文『『デカメロン』の誕生と公表について』において、その推定を「疑いなく正確」⁴¹⁾だと追認しているが、ボッカッチョが作品の着想を得た時期は、おそらくそれよりもかなり早かった可能性があり、ひそかにノヴェッラの習作が試みられていたことも十分あり得る。その後ベスト大流行の最中または直後のある瞬間に額縁の構想が浮かび、それに基づいて執筆と推敲が進められ、『デカメロン』は比較的短期間に完成されたものと見なして差し支えあるまい。

このようにこれまで一度もノヴェッラを公表したことがなく、もっぱら超現実的な世界を舞台にして、フランス文学の影響が濃厚な作品を書き続けて来たボッカッチョが、突然当時としては最も現実的な世界を扱ったノヴェッラ集を書き始めたことは、フィレンツェのみならずイタリアとヨーロッパの読書界に衝撃を与えたようである。全作品が完成した後に発表されたのではなく、書き上げられた部分が順次発表されたことは、第四日目の序でボッカッチョが作品に対する非難に対して弁明していることから

も明らかである⁴²⁾。10話×10日分という単純な構成でできていて、各々のノヴェッラが独立しており、娯楽性が抜群に高く、額縁という仕掛けによって朗読という口承的な享受法に最適の形で創作されていた『デカメロン』という作品は、こうした発表方法に適していたはずである。おそらくダンテの『神曲』も同様の仕方では発表されたため、まだ未完成の内からダンテの名声は高かったものと思われるが、ボッカッチョも『デカメロン』がまだ未完成の内から、フィレンツェ内外で名声を得て、その完成が期待されていたものと思われる。

こうして『デカメロン』が完成された時、それはフィレンツェのみならずトスカーナ一円の商人たちから熱狂的な支持を得たようである。現在残っている多数の写本の驚くべき分布状態から、ブランカ博士は『中世のボッカッチョ』の第一論文「中世の写本（の総体）」において、そうした熱狂ぶりを明らかにしている⁴³⁾。商人たちが我先に争ってその写本を求め、知人の許に送った結果、この作品自体が商品価値を持つことになったが、権威ある修道院の図書館よりも、商人階級の個人蔵書に異例の浸透ぶりを示したのに加えて、専門の写字生の手によって仕上がるのが待ち切れず、商人自らが写本作りに熱中し、普通ならば考えられないような人々までが熱心にそのテキストを自ら筆写したことが、今日残されている写本によって分かるという⁴⁴⁾。ブランカ博士が『デカメロン』を「中世商人の叙事詩」⁴⁵⁾と呼んだことは周知の通りだが、単に内容がそうであるだけでなく、この作品が完成した後、商人階層から熱烈に歓迎され支持されたという事実があったことをも、博士は証明しているのである。ところが同じ時期に、知識人たちはこの作品に対して、かなり冷淡な反応を示していて、ボッカッチョに敬愛され久しく親交を結んでいて、X-10をラテン語に翻訳したペトラルカですら、『デカメロン』をボッカッチョの最高傑作とは認めていなかったらしい⁴⁶⁾。そう言えば年代記作者フィリッポ・ヴィツラーニな

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

ども、ボッカッチョを当代のフィレンツェを代表する文学者として紹介しながら、『デカメロン』を書いたことを後悔したことだけを、タイトルも挙げずに記している⁴⁷⁾。

このように、これまでノヴェッラの書き手とは考えられておらず、フランス文学の影響にどっぷりと浸かって、神話や幻想の世界を舞台にした現実離れした作品を書き続けていたはずのボッカッチョが、突如発表し始めたノヴェッラ集によって、あつと言う間に市民の人気を集めたのであった。しかもその作品は発表され始めてから比較的短期間で完成され、イタリアのノヴェッラの歴史に前代未聞の成果を示したばかりか、どうやら後世においても、このジャンルでこの傑作を超える作品は生まれなかったようである⁴⁸⁾。すでに見たとおり、おそらく『ノヴェッリーノ』という前例がなければ、この作品は誕生しなかったはずだが、この作品が完成されなければ、ノヴェッラというジャンル自体が容易に確立されず、説教集や聖者伝や警句集などという類似のジャンルの間で、長期間にわたって迷走し続けた可能性が高い。いわば『デカメロン』の存在は、イタリアのノヴェッラというジャンルにとって単なるお手本どころではなく、なくてはならぬ基盤だったのである。当然ボッカッチョにおける超現実的な世界から現実的な世界への転換がなぜ、どのようにして生じたか、という疑問が発生し、それに対してベスト体験やダンテの伝記の執筆など、様々な説明が考えられるが、ここでは最低限ボッカッチョの作品の世界に歴然とした転換が認められることを指摘するだけに止めたい。こうした転換が後のイタリア・ノヴェッラに及ぼした影響については、『デカメロン』のエロスの影響とともに次の章で検討する。

第四章 現実性とエロスはいかに伝えられたか

いよいよ本章で、先に額縁と並ぶ『デカメロン』の最も重要な遺産と見

なした現実性およびエロスが、前述の三作品の中でどのように継承されているかを検証する。まず現実性に関しては、『デカメロン』以前のノヴェツラ集と『デカメロン』自体および『デカメロン』の後に現れた前述の三作品において、どの程度の割合で魔法や奇跡などといった超現実的な出来事が出現しているかを調べたい。極めて単純な比較であるが、超現実的な出来事が語られているノヴェツラが多ければ多いほど、その作品は現実性が希薄だと見なすことができるはずである。エロスに関しては、前論文で用いて性行為関連度という尺度を他の作品との比較に容易な形に修正して¹⁾、客観的に各作品を比較しながら、『デカメロン』で開花したエロスの遺産がどのように継承されているかを検証する。

そこでまず現実性の比較のための基準として、『デカメロン』以前のノヴェツラ集および『デカメロン』自体において、超現実的な出来事がどのような形でどの程度の頻度で現れるかを調べておく必要があるだろう。ただし前論文で用いた、作品全体を短い散文の集合体と見なして、その全体数に対する関連事項に該当する散文単位の比を計算する方法は多様な形態を有する初期の作品群に現れたエロスの濃度の検出を行うために必要と思われるために採用したが、作品全体を散文単位に分割する作業があまりにも煩雑であり、しかも今後他のノヴェツラ集と比較する場合には同一の基準を用いる必要があるので、本論以後は原則としてより単純に、各作品の全ノヴェツラ数に対する関連事項に該当するノヴェツラの比率を示すことに止めたい。まず外来のノヴェツラ集としてイタリアに普及していた作者不明の『七賢人の書』の場合、鳥居正雄訳のカッペッリ版の『Libro dei sette savi di Roma』²⁾では、額縁と14話の合計15話で成り立ち、その内超現実的な内容を含む作品は、額縁（占星術による予見）、第六話（まだ幼いころの魔術師メルリーノが暴露した魔法の釜）、第七話（告げ口するカササギ）、第十二話（ローマの守り鏡）、第十四話（鳥の言葉が分かる息子）

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

の計5話（33.3%）であり、西村正身訳の『七賢人物語』³⁾では、額縁と15話の合計16話に対して、額縁（同前の予見）、6（告げ口鳥）、7（メルリーヌと7つの水源）、9（魔術師ウェルギリウスの塔）、10（甥殺しに対する神罰）、15（鳥の言葉が分かる息子）の計6話（37.5%）である。いずれの場合も全体の約3分の1に超現実的な話が現れている。

『ノヴェッリーノ』の祖型とされている『ウル・ノヴェッリーノ』⁴⁾では、全85話に対して、該当するノヴェッラ（モデュロ）は、2（宝石の魔力）、3（同前）、4（超人的洞察力）、8（ダヴィデに対する神罰として天使が人民を殺す）、9（ソロモンへの神罰が息子に降り懸かる）、24（シャルルマーニュの亡霊が遺言の執行を怠った親族を空中に引き上げて殺す）、32（皇帝と魔術師たち）、35（魔術師メルリーノ）、57（予言者と天使）、58（王と天使）、62（トラヤヌス帝の天国入り）、70（魔術師メルリーノの予言）、74（同前）、79（ナルシスと愛の神）の計14話（16.5%）、その後何度も書き改められて16世紀に完成したとされる『ノヴェッリーノ』⁵⁾自体は、全100話に対して、2（宝石の魔力）、3（超人的洞察力）、6（ダヴィデの神罰）、7（息子が受けたソロモンへの神罰）、18（シャルルマーニュの亡霊の罰）、21（皇帝と魔術師たち）、26（魔術師メルリーノの洞察と忠告）、36（予言者と天使）、37（王と天使）、46（ナルシスと愛の神）、69（トラヤヌス帝の天国入り）、75（神と吟遊詩人）、78（幻）、83（キリスト）、94（動物説話）の計15話（15%）で、原型に較べてほんのわずか小さな数字になっている。

そこで『デカメロン』自身の場合であるが、たとえば日頃旅の守護聖人聖ジュリアーノ⁶⁾に帰依していた男が、強盗に遭っても良い目を見るなどというあまり因果関係がはっきりしないⅡ-2のような場合は除外すると、全部で100のノヴェッラの内、亡霊が夢に現れる話（Ⅳ-5）、地獄の幻が地上で見える話（Ⅴ-8）、死者の亡霊が現れる話（Ⅶ-10）、予知夢（Ⅳ

－6, IX－7), 魔法の話 (X－5, X－9) などの7話 (7%) [II－2を含めると8話 (8%)] に過ぎず、『ノヴェッリーノ』や『ウル・ノヴェッリーノ』の約半分に減少している。こうした超現実的な出来事が半減していること自体極めて重要であるが、それ以上に劣らず重要な事実が、『デカメロン』に関してその他に少なくとも二つ存在する。その一つは、ボッカッチョがこうした超現実的な出来事を、外枠や額縁などの地の文においてではなく、必ず語り手の一人の口を通して語らせているという事実である。それは、ボッカッチョ自身がこうした出来事を語っている訳ではなく、あくまで「他人性」⁷⁾に基づいて、語り手の一人にその責任を押し付けようとする一貫した態度の現れである。もう一つは、奇跡や魔法など超現実的な出来事を信じている人々を対象とした悪戯または欺瞞⁸⁾が、『デカメロン』には頻繁に描かれているという事実である。『デカメロン』の全作品の性格を方向づけたと言っても過言ではないパンフィロが語ったI－1そのものが、告解の際の問答を通して、自分を聖人だと信じこませてしまう巧みな欺瞞の一例であった。聖人とは、奇跡と切っても切れない関係の超現実的な存在で、事実本物の聖人の遺体は奇跡を起こすものと見なされているのである。さらにII－1も聖人の奇跡を利用して悪戯しようとして失敗した結果起こった喜劇である。その他にもIII－1 (唾が口を利く), III－4 (聖人志願者をだます), III－8 (睡眠剤による煉獄), IV－2 (天使に化ける), VI－10 (聖遺物), VII－1 (幽霊), VIII－3 (魔法の石), VIII－9 (魔法の集い), IX－5 (女に好かれる護符), IX－10 (女を馬に変える魔法) など、こうした奇跡や超現実的な現象を利用した悪戯や欺瞞のノヴェッラは、計12篇 (12%) の多数に及ぶ。『デカメロン』の現実性は、むしろこうした超現実的な出来事を装った欺瞞や悪戯のノヴェッラによって、より鮮明に主張され表現されている、と言えるはずである。

『ペコロネ』という作品は、すでに見たとおりノヴェッラの部分とジ

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

ヨヴァンニ・ヴィツラーニの『年代記』の要約の部分から成り立っているため、『デカメロン』の遺産の検証も一筋縄では行かない。すなわちこの作品は、すでに記したとおり前半の約三分の一と最後の作品を除く全体の三分の二弱が、ジョヴァンニ・ヴィツラーニの年代記の紹介なのである。だから『デカメロン』の影響を探るためには、まずノヴェッラの部分だけを調べなければならない。何故なら私達は今ノヴェッラについて論じているのだから、たとえ短い散文というノヴェッラと同じ形態を借りていても、「虚構性」という要件を無視して年代記の要約と紹介に終始している広義のノヴェッラを、そのまま他の狭義のノヴェッラと一律に扱うわけにはいかないからである。その立場に立って計算すると、I-1, 1-2, II-1, II-2, III-1, III-2, IV-1, IV-2, V-1, V-2, VI-1, VI-2, VII-1, VII-2, IX-1, IX-2, X-1, XXV-2の計18篇が狭義のノヴェッラに該当する。それら18篇の内、修道女と交わったために死後に罰を受けたことを記したXXV-2ただ1篇(5.56%)を除いて、すべて超現実的な登場人物や現象とは無縁である。すなわち『デカメロン』を継承した形のノヴェッラを創作した場合には、セル・ジョヴァンニが奇跡や魔法とは縁のない現実的な世界を舞台に選んでいたことが、この数字によって明らかである。では作品の大半を占めている年代記の要約と紹介の部分についてはどうであろうか。それら32篇の内、自分の首を望みの場所に運んだ殉教者聖ミニアート(XVII-2)、教皇アクキサンデル三世の奇跡(XIX-1)、後英国王となるウィリアムを懐妊した時母親が見た夢と英国王ヘンリーへの神罰(XIX-2)、悪魔の予言(XXI-1)、スペインの奇跡(XXII-1)、教皇インノケンティウス三世の夢(XXIII-1)などを扱った少なくとも6篇(18.75%)において、超現実的な出来事が語られている。それらは大体後半の末尾近い部分に集中して現われている。このように作品の性格によって生じた大きな差と、ノヴェッラの部分に現れた顕

著な現実性は、『デカメロン』の影響の現れと見なし得るものである。作品全体としては、全50篇に対して7篇（14%）というほぼ『ノヴェッリーノ』に近い数字となるが、それは年代記の要約の部分によって水増しされた数字に他ならない。

サッケッティの『三百話』となると、雰囲気は『ペコロネ』の世界よりもはるかに日常的になり、その現実性が一層安定したものとなっている。事実超現実的な出来事は、極めて稀にしか記されていない。ところでサッケッティの作品は、いくつかの作品が断片化しているだけでなく、一つのノヴェッラに多数のエピソードが詰め込まれているために、その内容を数的に把握することは案外困難である。しかし多少の誤差には目をつぶることにして、元は300篇あったのに対し、失われたノヴェッラが78篇、意味不明の断片が4篇あるとしてそれらを除くと、218篇という総数が得られる⁹⁾。それほど多数のノヴェッラの中で、超現実的な事柄を扱っているのは、修道士が女の許におき忘れたパンツを取り戻すため、聖遺物だと嘘をついてうまく取り返したが、その罰で癩病にかかる話（CCVII）と、聖アルベルトゥス・マグヌスが豊漁のために宿屋の主人のため木の魚を作ってやる話（CCXVI）のわずか2篇（0.917%）に過ぎない。したがって『三百話』は、『デカメロン』と比較しても、はるかに現実主義的なノヴェッラ集なのである。たとえば CLI において作者自身が占星術師を質問攻めにしてやりこめたことを自慢しており、また CLVII では聖ウゴリーノの遺体を見せられて、紹介者の手前あえて否定はしないが「私には良いことも悪いこともし給うな」¹⁰⁾と祈ったスペイン人を共感をこめて描いている。また大金持になる夢を見た男が猫の糞まみれになる CLXIV は、『デカメロン』で繰り返し語られている数少ない超現実な現象である予知夢（IV-6, IX-7）のパロディーと見なすことができる。つまりこの側面においては、生来サッケッティ自身の方が、ボッカッチョよりもはるかに徹底し

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

た現実主義者であり、合理主義的な精神の持主だったと見なすべきだと思われる。おそらくこの時代の多くのフィレンツェ市民の間では、こうした現実主義が共有されていて、ボッカッチョ自身『デカメロン』執筆に際して自らその内面において変化したというよりも、むしろこうしたフィレンツェ市民たちの現実主義によって一時的に強く影響されたと考えた方が、実情に近いように思われる¹¹⁾。この点でもサッケッティはボッカッチョのエピゴーネンとは言えない。

セルカンビの『ノヴェッリエーレ』の場合、超現実的な内容を扱ったノヴェッラは全155話に対して、I（超人的洞察力）、IV（同前）、VI（神罰）、XIV（超人的能力）、XXXV（女にほれられる魔術）、XXXVIII（マリアと悪魔と天使）、XXXIX（天使と悪魔）、XL（マリアの絵）、XLI（占星術師の予言）、XLV（扉の音）、XLVI（白の力）、XLVIII（魔術師ヴィルジリオ）、[LXXXI（聖ジュリアーノ）]、CXXI（竜）、CXXIII（悪魔との契約）、CXXXI（神明裁判）、CXLI（聖マルティーノの贈り物）、CXLIX（聖マルティーノの罰）と、聖ジュリアーノの御利益を除いても計17篇（10.97%）[加えると18篇（11.61%）]というかなり高い比率に及ぶ。これは同じトスカーナでもルッカにはまだフィレンツェのような現実的、合理的精神がそれほど浸透していなかったためであろう。むしろCXXIの竜の話や、XLVIIIの魔術師ヴィルジリオ¹²⁾のような中世の民間伝承をいち速く記録¹³⁾しているところに、この作品の資料的価値があると見なすべきである。逆に『デカメロン』で多数見られた、奇跡や魔術など超現実的な出来事の裏をかいた悪戯や欺瞞も、XXI（偽の占星術）、LXV（麻薬の天国）、XCIII（偽の奇跡）、CXVI（天国の栄光）、CXXII（石を食べるというペテン）、CXXVIII（嘘の夢枕）の計6篇（3.87%）しかない。それでも『デカメロン』以前の『ノヴェッリーノ』や『ウル・ノヴェッリーノ』に較べると、超現実的な作品は小さな比率を占めていて、この作品が他の何人も記して

いない当時の地方都市の貴重なドキュメンタリーのおよび民話的資料を赤裸々に記録することができたのは、やはり『デカメロン』の影響によるものと考えて差し支えないであろう。

他方前論文で示したとおり¹⁴⁾、それまでのイタリア文学における遅れを取り戻すかのように『デカメロン』において一挙に開花したエロスは、三つの作品にどのような痕跡を止めているであろうか。ちなみに前論文では、イタリア・ノヴェッラ確立される以前の多様な形態の作品と比較するために、作品全体を短い散文の単位に分割して全体との比率を求め、『デカメロン』の性行為関連度を37.70(%)と算出したが、今後のノヴェッラ集との比較においては、より単純に、全100篇中の46篇で性行為が関連しているので、46(%)を基準値として採用して比較を行いたい。

『ペコロネ』という作品は、前述の通り純粋なノヴェッラと年代記の要約との二本立てで出来ているので、二つの部分に分けて検討する。まず先に純粋なノヴェッラ18篇の中で、性行為が関連しているのは以下の通りである。ただし記号は、不倫は*、未遂は☆、聖職者関連は◎、性行為の関連度があまり高くない場合には§、レイプはRとする。

I-1*☆, I-2*, II-1*§, II-2*☆, III-1◎, III-2*,
IV-1 (『ヴェニス商人』の原作), IV-2*☆§, VII-1*, VII-2,
IX-1§, IX-2, XXV-2◎ (修道女) 小計13篇 (72.2%)

それに対して、年代記の要約の部分では性行為に関連する作品はあまりなく、しかもすべてが部分的にしか関与しない。それでもあえて数えると次の6篇(18.75)となるが、実質はその10分の1にも達しないであろう。したがって全作品の性行為関連度は、全50篇に対する前出の13篇(26%)プラス・アルファ程度である。

X-2◎ (巫女) §, XVI-1◎ (同前) §, XVI-2 R §, XVII-1* §, XVIII-2 ☆ §, XIX-2 (替玉) §

以上の数字によって明らかにされたことは、この作品の純粋なノヴェッラの部分における超現実的な作品の極端な少なさと、逆にノヴェッラ数に基づいて算出した場合の性行為関連度の高さである。ノヴェッラ作者としてのセル・ジョヴァンニは、現実性に関しても、エロスに関しても、ボッカッチョからその方向性をより強調した形で継承しようとしていたことが分かる。残念なことに、最後までノヴェッラ作者であり続けることができず、安易に年代記の要約に逃れたことが、この作品を『デカメロン』に継ぐ傑作に仕上げることが妨げた。

それに対してサッケッティは、額縁を模倣しなかつただけでなく、エロスに関してもボッカッチョによって影響された形跡は感じられない。

XIV*, XV* ☆, XVI*, XXVIII, XXXIV, LIII, LXXXIV*, LXXXV (浮気女の躰), LXXXVI (同前), CI◎ (三人の隠修道女), CVI*, CXI◎, CXII, CXXXI, CLIV ☆, CXC R, CCVI*, CCVII◎* 小計18篇 (8.26%)

その絶対数は決して少なくないが、総数が218に及ぶために、その8.26%という比率は『デカメロン』の(ノヴェッラ数に基づく)比率46どころか、それ以前の『ノヴェッリーノ』にさえも遠く及ばず、その半数だった『ウル・ノヴェッリーノ』とほぼ同じ水準の低さである。しかしエロスに関連して、『デカメロン』がこの作品に影響を及ぼしていないかという、決してそんなことは言えない。上記の18篇のいくつかにははっきりと『デ

カメロン』との類似が認められる上に、性行為そのものは描いていなくても、以下のような広義の性的関心に基づく作品が多数見られるからである。

VIII (いかにして好きな女の好意を得るかに関するダンテの助言), XLI - 8 (娘を老人と結婚させる), XLVII (未亡人の再婚), LXXV (処女懐胎), XCIX (色黒妻), CIX (人妻が修道士にワインを飲ませる), CXVI (淫行で告発された修道士の抵抗), CXXVI (80歳で子供をさせた騎士), CXXX (猫が噛みついた夫の睾丸を妻が救う), CXLV (道化師に姪との同居が許されるかという裁判), CLVI (道化師による少女の脱臼した腕の治療), CLXXXIX (持参金を巡る交渉), CXCVI (流産の責任の取り方), CCVIII (蟹が女をはさむ), CCXVII (安産のまじない), CCXIX (妊娠のまじない), CCXXVI (雀の交尾と驢馬の交尾), CCXXVII (嫁が交尾する雀を羨む), CCXXXI (鶯鳥の代金としてキスさせよ) 小計19篇 (8.72%)

丁寧を探せば他にもまだ見つかるはずだが、たとえ基準を甘くしてそれらを合わせてもせいぜい『ノヴェッリーノ』の比率に近づく程度であり、『デカメロン』の水準の半分以下にも及ばない。現実性などの場合と同様、ここでもサッケッティは安易に『デカメロン』に影響されず、自らの独自性を守っていると言えそうである。にもかかわらず、サッケッティは詩人でもあるので¹⁵⁾ 問題をそのノヴェッラに限定した場合、女性を神聖視して恋愛と性行為とを完全に切り離して歌っていたダンテやペトルルカの叙情詩の世界から、サッケッティが完全に離脱していることは明らかであり、それまでダンテやペトルルカによって当然のごとく守り続けられていた、女性の神聖視という一種の偏向からイタリア語の文学を解放するために『デカメロン』が実例によって示した、女性の神聖視をやめて性行為の対象と見なすという新しい態度はサッケッティのノヴェッラにも確実に受け

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

継がれていることと、さらにそうした態度はイタリア語の散文世界全般に受け入れられて、すでに不可逆的に作用し続けていたことが推察できるのである。少なくともノヴェッラにおいては、ダンテやペトラルカのように女性を神聖視し崇拜することは不可能となった。

一見この上なく俗物的な人間が可憐な叙情詩の書き手であることは決して希ではないので、彼のすべての文学活動においてそうであったとは断定できないが、女性の神聖視をやめて性行為の対象と見なすという、『デカメロン』の女性観に全面的に共鳴しただけではなく、24篇もの作品において剽窃を行いな¹⁶⁾『デカメロン』を徹底的に模倣し尽くすことによって、155篇の『ノヴェッリエーレ』書き続けたのがセルカンビその人であった。彼は『デカメロン』の現実性からはそれほど感銘を受けなかったようだが、そのエロスからは衝撃を受けたらしく、そこに解放のサインを読み取って自らの進むべき道を見いだしたようである。彼の作品中性行為が関連しているものは以下のとおりである。

I §, IV*, VR, VIR, VII*, VIII*, X◎*☆, XI◎*☆, XII*, XIII◎*, XIV◎*, XVR☆, XVII◎, XXI §, XXVIII, XXIX, XXX◎, XXXI*, XXXII☆, XXXIII◎, XXXIV*, XXXV*☆, XXXVI*◎, XXXIX §, XLII R, XLVI*, XLVIII☆ §, L*, LI◎, LIIR, LVI, LIX*I, LXI*, LXII*, LXIII◎, LXXVIR, LXXVIII*, LXXX* §, LXXXI, LXXXII*, LXXXV, XCIII◎R, XCIV◎*☆, XCV*, XCVIII §, XCIX◎, C*, CI, CIII* (女性は不倫を自覚せず), CVI*, CX*◎, CXV* §, CXVI*◎, CXVII R ☆ §, CXVIII*, CXXIV*, CXXV*◎, CXXVI*, CXXVII*, CXXVIII*, CXXIX*, CXXXI R, CXXXII*, CXXXIV*, CXXXVII*, CXXXIX §, CXL◎, CXLII*, CXLIII*, CXLV*, CXLVII, CXLVIII*, CXLIX◎*, CL*, CLI

，CLIII，CLV*☆（後半欠落），小計77篇（49.68%）

実はこれ以外にも、女たちが男根の材質は何がのぞましいかを論じて豚の鼻だという判定が下されるXXV，ソラマメ畑の中では女性は男の誘いを拒否できないとするXXVI，自分の口臭を男性一般のものとして信じていたことで夫が妻の貞淑さを悟るXLI，未亡人がソーセージのおかげで醜聞を起こしていないことを認めるLXIX，さらに女性の陰部と話す能力で王女たちの発展ぶりを知るCXLIなど、おそらく上記の作品に劣らずエロチックな作品がいくつか存在していることも無視するわけにはいかない。すでに前論文で性行為関連度が必ずしもそのまま作品のエロスの濃度を表しているわけではなく、作品の絶対数とも関係することを指摘したが、全155篇でノヴェッラ数の比率に基づく性行為関連度がほぼ50%に及ぶこの作品が、全100篇で性行為関連度が46の『デカメロン』よりもエロスの濃度が高いかという点、必ずしもそうは断定できないようである。そのことは、この作品中に『デカメロン』の剽窃が多いことや、とりわけ聖職者相手の人妻の不倫というほとんど同じテーマが何度も繰り返し語られていて新鮮さや驚きを欠き、何となく薄汚い印象をあたえることと無関係ではなさそうである。古来この作品が猥褻だと非難され続けていることも、当然過ぎるほど当然である。だがいずれにせよ、セルカンビが『デカメロン』から受けた最大のメッセージは、エロス解放であったと見なすことができるだろう。

『デカメロン』からエロス解放のメッセージを受け取ったノヴェッラ作者はもう一人いて、シエナ人のジェンティーレ・セルミーニ¹⁷⁾と言い、作品のタイトルは簡単明瞭、『ノヴェッレ』¹⁸⁾である。彼の40篇のノヴェッラの性行為関連度は以下のとおりである。

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

I*, II◎, IV*, VII*, VIII*, IX◎*, X◎*, XI◎, XIII*, XIV☆,
XV*, XVII◎*, XVIII, XIX◎*, XX*, XXI*, XXII*, XXIII◎,
XXIV*, XXVI*, XXVII §, XXVIII*, XXXIII◎, XXXVI*, XXXVII,
XXXVIII*, XXXIX, XL* 小計28篇 (70%)

この作者については、彼自身がこの作品の中で記した¹⁹⁾、すでに成人していた1424年にペストを逃れてシエナ領域部の大変な田舎へ行っただけのこと以外何も分かっていないということだが、その作品全体のなんと7割が多少とも性行為に関連しているのである。彼もまたセルカンビ同様、『デカメロン』にエロス解放の合図を見いだして、エロスを自分のノヴェッラ集の最も重要なモチーフと見なした作者であった。そして彼の作品にもダンテとペトラルカに共通して見られた女性崇拜はかけらもなく、女性はまず性行為の対象と見なされていて、もはや『デカメロン』以前の状態に復帰することは不可能であった。その第一話に阿片を用いて死者と見せかけるという、『ロミオとジュリエット』の遠い原型²⁰⁾が含まれているために、国際的知名度は結構高い作品ではあるが、セルカンビ同様古来猥褻だとする非難が高いことを当然だと言わざるを得ない。

ただし一言彼らの弁護を試みるとすれば、もともと地中海の地母神崇拜²¹⁾の伝統につながるマリア崇拜²²⁾の強い地域にあって、ダンテを始めとする清新体派の詩人たちやペトラルカの詩が、余りにも女性を理想化し過ぎていたという事情を考慮しなければならない。彼らがあまりにも女性を聖なるものとして描いたために、その反動で偶像破壊の衝動を、特にトスカナ地方の詩人や作者の間に引き起こしたもののようである。それは聖職者の実際の在り方が建前と余りにも違い過ぎるのを暴く衝動とも重なり合っていたようである。当時の既婚夫人たちがそれほど頻繁に不倫に耽り、聖職者たちが戒律を破っていたとは到底考えられないが、はるかに低い頻

度で起こるスキャンダルであっても、作者たちの暴露衝動をかき立てるのには十分だったのだろう。我々が社会主義諸国の現実に笑いを禁じ得なかったのも、彼らが高い理想を掲げて「人民民主主義共和国」などと名乗っていたからで、それと同様中世イタリアの女性たちも、マリア信仰やダンテやペトラルカの傑作によってあれほど神聖化されていなければ、ボッカッチョやセルカンピやセルミーニによってあれほどの熱意を込めて、スキャンダラスに描かれることもなかったに違いあるまい。

注

第一章

- 1) 拙稿、『デカメロン』式額縁の基本的効果、桃山学院大学『国際文化論集』第34号、大阪、2006年6月所収。同、額縁は『デカメロン』の完成にいかにか寄与したか、桃山学院大学『国際文化論集』第35号、2006年12月所収、同、額縁に守られて——イタリア・ノヴェッラにおけるエロスの開花——、桃山学院大学『国際文化論集』第36号、2007年6月所収。
- 2) A cura di Alberto Conte, *IL NOVELLINO*, Roma 2001, SALERNO EDITRICE, p. 278.
- 3) *Ibid.*, INTRODUZIONE, p. XVI, NOTA AL TESTO, p. 282.
- 4) 米山・鳥居、『イタリア・ノヴェッラの森』、大阪 1993、1ページ所収のアメリカの『イタリア文学事典』(*Dictionary of Italian Literature*, Connecticut 1979. p. 360) による定義と同じ『森』の29ページ所収のバターリア大辞典第11巻の novella の項 (S. Battaglia, *GRANDE DICZIONARIO DELLA LINGUA ITALIANA*, Vol. XI, Torino 1981, pp. 600-2) およびセグレの定義 (La novella e i generi letterari, in “*LA NOVELLA ITALIANA—Atti del Convegno di Caprarola 19-24 settembre 1988*”, Tomo I, Roma 1989, SALERNO EDITRICE, p. 47.
- 5) *Encyclopedia of Italian Literary Studies*, Vol. II, New York & London, 2007, Routledge, p. 1295.
- 6) 『ノヴェッリーノ』の作品21は魔術師を扱い、「信じられる領域」にはないが、おそらく同作品中で最も興味深いノヴェッラの一つであると思われる。

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

- 7) 注5) と同じ。
- 8) 注4) のセグレに関する箇所と同じ。
- 9) 注1) に上げた3つの論文参照。
- 10) 拙稿、紙の上の宮廷——中世・ルネサンス期イタリアにおけるノヴェッラ集の枠組の変遷——、『イタリア学会誌』第40号、東京 1990、4. a 参照。16世紀だけでも、少なくとも12人の作者が『デカメロン』式額縁を用いた作品を残している。
- 11) 『デカメロン』、I-2、ブランカ博士が校訂したモンダドーリ版全集の第4巻では48ページ。
- 12) I-1以降『デカメロン』全巻を通して現れるが、特に第七日、第八日のテーマ。
- 13) 注1) の第三論文「額縁に守られて」、特に48ページの表を参照。
- 14) 『デカメロン』第六日のテーマ。
- 15) 『デカメロン』第二日と第三日のテーマ。第四日と第五日も深く関わっている。
- 16) 『デカメロン』第四日のテーマ。
- 17) 『デカメロン』全巻を通して現れるが、特に第十日のテーマ。
- 18) 1924年にミラノの Casa Editrice DOTTOR FRANCESCO VALLARDI から出版された *STORIA DEI Generi Letterari Italiani Novellistica DEL PROF. LETTERIO DI FRANCIA*。
- 19) ヤコポ・パッサヴァンティ (1302ごろ~57) は、ドメニコ派の修道士でピサ、シエナを経て祖国フィレンツェのサンタ・マリーア・ノヴェッラ修道院の説教師として活躍し、すでに紹介した通りその著書『真の改悛の鑑』は、石坂尚武氏によって翻訳されている。同志社大学『人文学』、第168、169、170号参照。フィリッポ・デッリ・アガッツァーリ (1339ごろ~1422) はシエナに生まれ、若いころ放埒な生活を送った後シエナ近郊のアウグスティヌス会隠遁派の修道院に入り、聖人に近い長命な生涯を生きたとされており、『奇跡と範例 (*Miracoli e assemprì*)』を書き残した。ポーノ・ストッパーニも1315年ごろから75年ごろまで生きたアウグスティヌス会隠遁派の修道士で、ラテン語で200の例話集 *Liber de fabulis mystice declaratis et proverbialis* (論証と諺の神秘の寓話集) を書き残した。他の作家については、後に触れる。

- 20) 『シチリアの冒険家 (*Avventuroso Siciliano*)』は1311年にボゾーネ・ダ・グッピオによって書かれたとされていたが、デイ・フランチャは、その中にそれ以後の作品が多数取り入れられているのでそれはあり得ないことだと見なしている。しかし単なる構想者としての可能性は認めている。内容は、シチリア晩禱事件が原因で島を離れた5人の領主の内2人はアフリカで倒れるが、残る3人が富裕になって帰国するまでの旅とその途中で聞いた物語とで成り立っている。
- 21) 本章注19) および注1) の第三論文「額縁に守られて」、44～5 ページ。
- 22) 本章注19) 参照。
- 23) 同。ラテン語で書かれた作品のイタリア語訳。
- 24) セル・ジョヴァンニは14世紀の恐らく公証人でノヴェッラ作者だが、『ペコロネ』の作者であること以外ほとんど不明。米山・鳥居, 前掲書, 84～165ページ所収の拙稿, 『イル・ペコロネ』の梗概参照。
- 25) 米山・鳥居, 前掲書, 166～262ページ所収の拙稿, ジョヴァンニ・セルカンビの『イル・ノヴェッリエレ』について——地方都市の文学の運命, および清水純一教授退官記念論文集刊行会編, 『イタリア・ルネサンス文化——知の饗宴——』, 京都 昭和63年, 75～91ページ所収の拙稿, セルカンビの暗闇——その『年代記』と『グイニージ家の人々への覚え書』の世界——参照。
- 26) 大阪外国語大学イタリア語研究室『*AULA NUOVA* イタリアの言語と文化』第2号, 大阪 1999所収, 拙稿, 『イル・トレチェントノヴェッレ』の輪郭, 参照。

第二章

- 1) 作品の末尾につけられたソネットによる。なお以下の記述の基となったテキストは, Ser Giovanni Fiorentino, *Il Pecorone*, a cura di Enzo Esposito, Longo Editore, Ravenna, 1974. 末尾のソネットは作品の末尾, 同書の568ページに付けられていて, その中に珍しい馬鹿者たちいるから, 「私と親しい一人の紳士 (un mio car signor)」によって「ペコロネ (大きな羊, 愚か者)」と名付けられたことと, 自分はそうした馬鹿者の群の頭目で, 自分の名声が愚かな人々に敬われるためにこれを書いたと記している。

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

- 2) 第一章の注18) の178ページ以下300ページまでが同書の第三章。
- 3) 第一章の注1) の第一論文、『デカメロン』式額縁の基本的効果、の第三章参照。
- 4) 本章注1) の Proemio (pp. 3-7) の部分の要約。
- 5) XXV - 2 の末尾の部分, p. 567.
- 6) 『デカメロン』第四日の冒頭でIV - 1 の前置きの部分。
- 7) Giovanni Villani, *Cronica* には多くの版があり、フィレンツェで刊行された1823年版が優れたものと見なされていて、1980年にローマで復刻版が刊行されている。なおボローニャ留学中にお世話になった星野秀利先生から、この作品の校訂版を企てた者は死ぬという伝説を伺ったことがある。その星野先生もすでに故人である。
- 8) Agnolo Firenzuola, *Ragionamenti*. 『大阪外国語大学論集』第9号、大阪1993所収の、拙稿、A. フィレンツォーラのノヴェッラ紹介参照。
- 9) Antonfrancesco Grazzini detto il Lasca, *Le Cene*. 米山・鳥居、『イタリア・ノヴェッラの森』、前掲書、534~579ページ所収の拙稿、Antonfrancesco Grazzini, detto il Lasca の『晚餐』の輪郭参照。
- 10) 『デカメロン』X - 4 およびX - 5 はそれぞれ『フィローコロ』の恋愛評定の設問13および設問4 とほぼ同じ出来事を扱っている。第一章の注1) の第三論文「額縁に守られて」、60ページ参照。
- 11) John M. Najemy, *A HISTORY OF FLORENCE 1200-1575*, 2006 Malden (USA) Oxford (UK) Carlton (Australia), BLACKWELL, p. 150.
- 12) Di Francia, op. cit., CAP. III.
- 13) サッケッティの『三百話』のテキストは、Franco Sacchetti, *IL TRECENTO-NOVELLE*, a cura di Emilio Faccioli, Giulio Einaudi editore, Torino 1970 を利用した。なお要約と引用は PROEMIO の部分より行った。
- 14) 第一章注26) の論文「輪郭」によるとフィレンツェ市内が31.2%, その周辺が8.1%合計40%となる。
- 15) 額縁の「他人性」の効果については、第一章注1) の第二論文の第三章と第三論文の第三章の49~50ページ参照。
- 16) *Encyclopedia of Italian Literary Studies*, op. cit. Vol. II, p. 1649.
- 17) 本章注13) のテキストの NOTA BIO-BIBLIOGRAFICA, p. XXII, その他の

資料でそのように記されている。

- 18) 額縁をつけると各作品の前後に語り手や語られた状況に関する説明が必要になる。
- 19) たとえば NOVELLA V の冒頭で「話題を変えたい」などの断りがついたり、前の話でこの話を思い出したなどというつなぎの言葉が用いられている。
- 20) たとえば当時ダンテの詩および詩一般が民衆に歌われていたことは、『三百話』の第十四話で、鍛冶屋が自分の作品を間違えて歌っているのを聞いて腹を立てたダンテが、彼の道具類を店からほおりだしたというエピソードなどから明白で、当時の人々にはそれらの詩がある種のメロディー付きで聞こえて来たらしい。額縁を用いたセル・ジョヴァンニやセルカンビの作品に多くの詩が取り入れられ、詩人としての実績も力量もはるかにすぐれたサッケッティの『三百話』には詩が皆無に近いという事実も、『三百話』では歌の力で額縁の単調さに対処する必要がなかったためだと考えることができる。
- 21) ボッカッチョの父は銀行家として一時期成功したが、チェルタルド出身のその一族はフィレンツェ市内ではスベルさえも確定しない無名の家系だったのに対して、サッケッティの一族は、ヴィッラーニの『年代記』の第五卷三十九章において、1215年に勃発した最初のゲルフィ党対ギベッリーニ党の紛争当時の主要な家族のリストにサン・ピエロ・スケラッジョ教区のゲルフィ党貴族として記されており、またダンテの『神曲』の『天国篇』、第十六歌の104行の冒頭にも歌われているフィレンツェ屈指の名家である。フランコ自身も若いころには金融業にも従事したが、やがて市政に加わり主に周辺諸都市の行政官として活躍した。アルビッツィ派とリッチ派の党争から八聖人戦争、チョンピの反乱をへてジャンガレアツォ戦争に向かう激動の時代を生きただけのために、弟ジャンノツォが1379年にチョンピ政府によって処刑され、自らも弾劾決議されるなど波乱の時期も体験し、またジャンガレアツォ戦争で資産を失い借金に追われて惨めな晩年を迎えたとされているが、1384年にはプリオレにも選ばれ、ビッビエーナ、ファエンツァなどのポデスタやサン・ミニアートの代官など地方都市の最高位の行政官を勤めていて、当時としてはボッカッチョなどとは比較にならぬほどの有力市民であったことは確かである。
- 22) 本論文第四章でさらにこの問題を論じる。

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

- 23) 同書の序文 (Introduzione) で額縁が設定されている。なお作品の紹介と分析には、Giovanni Sercambi, *Il Novelliere*, a cura di Luciano Rossi, Roma 1974, Salerno Ed. を用いた。他に *Le Novelle*, a cura di Giovanni Sinicropi, Bari 1972, Laterza が刊行されている。一部の作品は度々紹介されてきたが、セルカンビのノヴェッラ集の全体はシニクローピの校訂版が出るまで、一度も刊行されていかなかったらしい。
- 24) 前注の Rossi の校訂版の Vol. I, p. 10.
- 25) Ibid. pp. 10-11. その中ではカエサルとプトレマイオスによるポンペイウスの死やキリストを売ったユダの死が歌われ、執筆当時のセルカンビの陰鬱な心境を示している。
- 26) ただシタリア巡礼の旅は帰途の終わりに近く、すでにラ・スペツィアの東でマグラ川の河口の破壊された都市ルーニ、直線距離で目的地ルッカから48キロの地点に達していたので、巡礼が完了する一歩手前であったことは確実である。
- 27) *Encyclopedia*, op. cit., Vol. II, p. 1737 の記述ではそう推定されている。
- 28) 本章の注23) に挙げた Sinicropi の校訂版の Nota Bio-Bibliografica, p. 766.
- 29) Ibid.
- 30) L. Rossi の校訂版の NOTA BIOGRAFICA, p. LXV.
- 31) セルカンビが若くして政治に関与して以来、フランチェスコ・グイニージの活躍とその死後の混乱を経て、グイニージ家の独裁が成立した後パオロ・グイニージの判断ミスで崩壊するまでの過程は Paolo Mancini, *Storia di Lucca*, Firenze 1950, pp. 153-197.
- 32) *Nota a Voi Guinigi, Nobilibus et Potentibus Viris, Dino, Michaelae, Lazzarino, et Lazario de Guinigi*, in *Le Cronache di Giovanni Sercambi lucchese pubblicate sui manoscritti originali*, a cura di Salvatore Bongi, Lucca (Roma) 1892, Vol. III,
- 33) 『ノヴェッリエーレ』の CXXXV, CXXXVI, CXXXVIII, CXLIV はそれぞれピサ、サン・ミニアート、パルマ、ニースを舞台にして、同じように自分の党派を軽視して敵の党派との和解を求めたリーダーの悲劇を描いている。
- 34) ルッカ随一の銀行家で、1375年フィレンツェのアルベルティ銀行に代わってグレゴリウス十一世時代の教皇庁の金融を扱うかたわら、ルッカのピサ支配からの独立に貢献して「祖国の父」と呼ばれる。1384年に死去してルッカ

の政治が混乱する。

- 35) 当時の薬屋は絵の具や筆記用具、紙なども扱い、文房具店や書店をも兼ねていた。
- 36) N. Sapegno, *Storia letteraria del trecento*, Milano-Napoli 1963, Riccardo Ricciardi Editore, p. 357.
- 37) フィレンツェを追われたギベッリーニ党の首領の一族で恐らくピサに生まれ、ギベッリーニ党色の強い政治詩や恋愛詩や『ディッタモンド』を書く。1365年以後に没。
- 38) ファツィオが『神曲』を模倣して書いた三行詩の長編で、古代の地理学者ソリヌスの案内で、主にヨーロッパ、アフリカの一部とわずかにアジアを旅行する架空の旅行記だが、未完で終わる。
- 39) 14世紀後半の詩人で音楽の作詞家として知られ人気が高かった。
- 40) *Encyclopedia*, op. cit.
- 41) たとえばXIVの超人的な能力の家来の話やCXXIの龍の話など。
- 42) 作者本人が、若いころ商用でルッカ特産の絹製品を持ってフィレンツェに向かう途中、山賊に遭ったというLXXIXや、CIVのマルチアーノという城塞の賭博熱、数々の犯罪記録など。

第三章

- 1) 参考にしたテキストは A cura di Vittore Branca, *TUTTE LE OPERE DI GIOVANNI BOCCACCIO*, Verona 1967, ARNOLDO MONDADORI EDITORE, Vol. I, pp. 15-43. 所収の *CACCIA DI DIANA* および pp. 679-705 の NOTE.
- 2) Ibid., pp. 61-675 の *FILOCOLO* および pp. 706-970 の NOTE.
- 3) 4) 白水社の『フランス文学事典』（東京 1974）651ページによると、12世紀後半か末に成立した韻物語。サラセン王子とキリスト教徒の奴隷娘との恋を歌うが、ボッカッチョの王子フィローコロは古代の神マルスやペローナの助けを得ている。
- 5) たとえば第二部42章ではヴィーナス自らがフローリオ（フィローコロの別名）の前にあらわれマルスと自分がフローリオを助けることを約束する（184～7ページ）。527ページの最も重要な戦闘の場面にペローナの女神が現れて助力する。この作品は結構戦闘の場面が多く、その点でもボッカッチョ

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

はダンテやペトラルカと異なる。

- 6) 参考にしたテキストは、GIOVANNI BOCCACCIO, *OPERE IN VERSI · CORBACCIO · TRATTELLOIN LAUDE DI DANTE · PROSE LATINE · EPISTLE*, A cura di Pier Giorgio Ricci, Milano-Napoli 1965, Riccado Ricciardi Editore, pp.167-256 所収の ‘DAL 《FILOSTRATO》’ さらに参考のために、Giovanni Boccaccio, *IL FILOSTRATO*, Italian text edited by Vincenzo Pernicone translated by Robert P. apRoberts (ママ) and Anna Bruni Seldis, New York & London 1986, Garland Publishing, Inc. を利用した。
- 7) 前出の『フランス文学事典』によると、ブノワは1130年ごろまでにサント・モールに生まれ、イギリス王ヘンリー二世の庇護を受け、『トロイ物語』を書き残した聖職者だが、その他に43000行の8音綴の長詩『ノルマンディー公列伝』を書いたという説もある。8音綴で30300行プラス16行のエピローグから成り、ブリセイダとトロイルスの恋愛譚を含む。
- 8) メッシーナ法廷の判事を勤めたグイド・デッレ・コロネネが、1287年に前注の作品をラテン語の散文に翻案した『トロイ物語』は、ヨーロッパで広く読まれた。この作品でも若き日のボッカッチョは中世フランス文学の熱心な紹介者であったことが分かる。
- 9) 本章注6) のリッチャルディ版のアンソロジーの ‘DAL TESEIDA’ (PP. 257-466). この作品はアンソロジーだが、フィアンメッタにあてた序文によって、粗筋は十分に把握できる。たとえばその第八巻では軍神マルスとヴィーナスが天上から下界の決闘を見ていて、やがてマルスがテセウスに化けて下界に干渉しているので、この作品に描かれているのは明らかに超現実的な空間である。
- 10) GIOVANNI BOCCACCIO, *DECAMERON · FILOCOLO · AMETO · FIAMMETTA*, A cura di Enrico Bianchi, Carlo Salinari, Natalino Sapegno, Milano-Napoli 1952, Riccardo Ricciardi Editore, *L'AMETO O COMMEDIE DELLE NINFE FIORENTINE*, pp.901-1057. これは注6) の書の第一部に当たるリッチャルディの選集だが、この作品は全文が掲載されている。
- 11) たとえば Giovanni Boccaccio, *L'Ameto*, translated by Judith Serafini-Sauli, New York & London 1985, Garland Publishing, Inc. の p. 154 の注12) によると、自分の恋を告白している7人のニンフの内、最年長で最初の告白者であ

るモプサは、確実に、Lottiera di Odoaldo dei Visdomini della Tosa だと見なされている。なおボッカッチョの分身らしき人物の一人は注10)の版の961ページ以下、死んだように倒れていてヴィーナスからニンフのエミリアに引き渡された若者イブリダで、その名前からして自分の私生児という出生を暗示している。もう一人は同じ版の1017ページ以下、ニンフのフィアンメッタの臥床にナイフを持ってしのび込んだ若者カレオーネである。

- 12) 参照したテキストは、*AMOROSA VISIONE*, A CURA DI VITTORE BRANCA, in *TUTTE LE OPERE DI GIOVANNI BOCCACCIO*, Verona 1974, ARNOLD MONDADORI EDITORE, VOL. III, pp. 1-272, なお同テキストはテキストA (pp. 25-148) B (pp. 149-272)の2篇が収録されている。
- 13) 前注と同じボッカッチョ全集第三巻所収の *NINFALE FIESOLANO*, A CURA DI ARMANDO BALDUINO 参照。
- 14) *CRONICA DI GIOVANNI VILLANI*, in *CRONICHE DI GIOVANNI, MATTEO E FILIPPO VILLANI*, Milano 年代記入なし, L'UFFICIO GENERALE DI COMMISSIONI ED ANNUNZI, LIBRO PRIMO, CAP. VI, p. 9.
- 15) ヴェットレー・ブランカ博士が監修したモンダドーリ版ボッカッチョ全集第一巻, ヴェローナ 1967年所収の博士自身によって書かれた *PROFILO BIOGRAFICO* の p. 66. そこには, questo primo romanzo psicologo e realistico moderno と書かれている。
- 16) テキストは, 注10) で記したリッチャルディ版のボッカッチョ選集の1058～1217ページに全篇が収録されている *L'ELEGIA DI MADONNA FIAMMETTA* を参照した。
- 17) 注6) の *PROFILO BIOGRAFICO*, p. 66 の Nota 1. による。
- 18) 同上。
- 19) ポエティウス, 『哲学の慰め』, 畠中尚志訳, 東京 19 年, 岩波書店, ページ。
- 20) 注16) のリッチャルディ版選集の1076～1082ページ。ティシフォーネだという確信は1082ページ。
- 21) 『リーム』にはブランカ博士が監修したラテルツァ版 (Bari 1929) などがある。
- 22) ラテン語で書かれた初期の習作や『書簡』の主なものは, *Opere latine*

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

- minore*, A cura di A. F. Massera, Bari 1928, Editore Laterza など収録されている。なお前注の『リーメ』と書簡類は、モンダドーリ版全集第五巻に収録される予定であったが、問題の第五巻は二部に分けられ、『コルバッチョ』などを含む第二部は1994年に公刊されたが、前注と前々注の部分を含む第一部は未刊のままであるらしい。この全集はすぐれた監修によって前世紀を代表する学問的成果となるはずであったが、実は第二巻も未刊のままのようであり、ブランカ博士もすでにご高齢で、完成が危ぶまれている。
- 23) 注6) のリッチャルディ版の『ボッカッチョ選集』第二部の651~703ページに収録されている DAL 《BUCCOLICUM CARMEN》* DALLE 《EGLOGHE》参照。
- 24) 同上の『ボッカッチョ選集』563~650ページに収録されている *TRATTATELLO IN LAUDE DI DANTE* 参照。
- 25) しばしば対話体形式が用いられる「牧人詩」または「田園詩」。
- 26) キオスのテオクリトスとは紀元前4世紀に生きて、マケドニア王国の支配を批判し続け、アレキサンダー大王に仕えたアリストテレスをも批判したギリシャの弁論家で、アンティゴノスによって処刑された。
- 27) 紀元前70~同19年に生きたローマの詩人。叙事詩『アエネーイス』の他『牧歌集』や『農耕詩』も有名で、中世の民間伝承では魔術師扱いられている。『神曲』の中の地獄と煉獄でダンテの案内役を務めている。
- 28) オルデラッフィ家は1333年以来フォルリーとその周辺を支配した独裁者の一族で、フランチェスコは1374年に死去。1358~67年のアルボルノス枢機卿のイタリア遠征で領土を奪われるが、一族は1376年に領土を回復し15世紀にも支配した。
- 29) ナポリ王国は1342年ロベルト・ダンジョー王が死去すると、孫娘のジョヴァンナー一世が王位を継ぎ、親戚のハンガリー王家のアンドレーアと結婚するが、権力争いの末夫を暗殺したため、その兄ルイージ（1383没）がイタリアに攻め込んだ。
- 30) 注23) の『エグローゲ』第三歌のファウヌスのメリスの言葉。1000の目を持つアルグスを褒めたたえているが、それはロベルト王を表していると思なされている（666-7ページ）。
- 31) モンダドーリ版『ボッカッチョ全集』第一巻所収の *PROFILO BIO-*

- GRAFICO の108ページ脚注 1) によると、この作品は計三度起草され、Ⅰ．1351年6月より少し後、Ⅱ．1360年ごろ、Ⅲ．1372年以前に少し訂正が加えられたという。
- 32) 前注の PROFILO BIOGRAFICO 72～73ページによると、ボッカッチョは1345～7年にラヴェンナに滞在し、領主ボレンター族や同市の名士と親交を結んだらしい。
- 33) リッチャルディ版の『ボッカッチョ選集』第二部の594～7ページ参照。
- 34) ペトラルカがイタリア俗語やプロヴァンス語の詩を、ラテン語の詩には及ばぬ未成熟なものを見なし、ダンテをも例外とは見なさなかったことは周知の事実である。それに対してボッカッチョはダンテを崇拜していた。たとえばイタリア・ダンテ学会によって刊行された *GIOVANNI BOCCACCIO EDITORE E INTERPRETE DI DANTE*, FIRENZE 1979, LEO S. OLSCHKI EDITORE に収録された以下の二つの論文参照。Gioacchino Paparelli, *DUE MODI OPPOSTI DI LEGGERE DANTE: PETRARCA E BOCCACCIO*, pp. 73-90. および Aldo Vallone, *BOCCACCIO LETTORE DI DANTE*, pp. 91-117. さらに岩波文庫赤 712-3, 近藤恒一編訳、『ペトラルカ＝ボッカッチョ往復書簡, VII ダンテをめぐる (123-151ページ) 参照。
- 35) E・アウエルバッハ, 篠田一士・川村二郎訳, ミメーシス ヨーロッパ文学における現実描写 上, 東京 昭和42年, 筑摩書房, 第九章 修道士アルベルト, 233ページ。
- 36) Dino Compagni, *Cronica*, a cura di I. Del Lungo, in R.I.S., IX, 2, Città di Castello 1907-1916. デ・サンクティスが『イタリア文学史』で激賞したこの作品は、たしか杉浦明平氏によって翻訳され『白黒年代記』として刊行されている。
- 37) Guido Cavalcanti (1250-1300) は清新体派の詩人、フィレンツェ白派の指導者。
- 38) Giotto di Bondone (1266-1337) 14世紀イタリア最大の画家でフィレンツェ大聖堂の「ジョットの塔」の建築設計も行う。
- 39) モンダドーリ版『ボッカッチョ全集』第一巻, 前出, *FILOCOLO*, L.IV, pp. 390-410, の設問4は『デカメロン』のX-5と, pp. 448-454 の設問13は『デカメロン』X-4と同じ内容を扱っている。

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

- 40) Giorgio Padoan, *IL BOCCACCIO LE MUSE IL PARNASO E L'ARNO*, Firenze 1978, LEO S. OLSCHKI EDITORE に収録されている *SULLA GENESI E LA PUBBLICAZIONE DEL «DECAMERON»*, p. 102.
- 41) Ibid.
- 42) 『デカメロン』 第四日の序 (INTRODUZIONE) 参照。
- 43) Vittore Branca, *TRADIZIONE MEDIEVALE*, in *BOCCACCIO MEDIEVALE*, Firenze 1975, G.G. SANSONI EDITORE, pp. 3-30.
- 44) Ibid., pp. 3-6.
- 45) Ibid., pp. 134-164. の第五論文は「商人の叙事詩」というタイトルで、なぜ『デカメロン』が中世商人の叙事詩であるかが、論証されている。
- 46) Ibid., p. 7. フィレンツェの人文主義者たちの大半もペトラルカと同様に反応した。
- 47) *CRONICHE DI GIOVANNI, MATTEO, E FILIPPO VILLANI*, op. cit., pp. 422-426. ボッカッチョが後年に若いころの作品を沈黙させようとしても、焼き消そうとしても無駄だった、とする (p. 425)。
- 48) Laura Ricco, *L'ACCADEMIA E LA NOVELLA NEL CINQUECENTO: SIENA E FIRENZE*, および Jon R. Snyder, *RISO, BEFFA, E POTERE: LA POETICA DELLA NOVELLA DI FRANCESCO BONCIANI DELL'ACCADEMIA DEGLI ALTERATI*, in *LA NOVELLA ITALIANA*, op. cit. など。

第四章

- 1) 本論文では主に『デカメロン』の影響を受けた、比較的形態が類似したノヴェッラ集を分析の対象としているので、まとまった散文の単位ではなく、ノヴェッラ単位で性行為関連度を算出して比較する。
- 2) 米山・鳥居, *イタリア・ノヴェッラの森*, 前掲書, 58~83ページ。
- 3) 作者不詳, 西村正身訳, *七賢人物語*, 東京 1999, 未知谷。
- 4) *LIBRO DI NOVELLE E DI BEL PARLARE [UR-NOVELLINO]*, in *IL NOVELLINO*, A cura di Alberto Conte, Roma 2001, SALERNO EDITRICE, pp. 163-264.
- 5) Ibid., pp. 1-162.
- 6) ヤコプス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』第30章などで世に知られた旅行者

- の守護聖人。モンダドーリ版の『ボッカッチョ全集』第4巻の1050～1ページのブランカ博士の注参照。リッチャルディ版の『ボッカッチョ選集』第一部のエンリコ・ピアンキの『デカメロン』の注(79ページ)では、救護団修道会員(dell'ordine dei frati ospitalieri)と記されている。
- 7) 第一章注1)の第二論文「額縁は『デカメロン』の完成にいかにかに寄与したか」の第三章と、それに対する自己批判を含む第三論文「額縁に守られて」の第三章参照。
- 8) イタリア語で beffa と呼ばれ、「悪戯」や「欺瞞」と訳している行為は『デカメロン』のいたるところに見られる上に、第7日と第8日の主題でもある。
- 9) *Encyclopedia of Italian literary Studies*, op. cit., Vol. II, p. 1649 による。私が第一章注1)の第一論文で用いた、まとまった散文の単位に分ける方法では、全部で258篇に及ぶ。この作品のみに関してならこの数字の方が実情に近い。大阪外国語大学イタリア語研究室刊行の『AULA NUOVA イタリアの言語と文化』, 第2号所収の拙稿, フランコ・サッケッティの『イル・トレチェントノヴェッレ』の輪郭参照。
- 10) Franco Sacchetti, *IL TRECENTONOVELLE*, A cura di Emilio Faccioli, Torino 1970, Giulio Einaudi Editore, p. 439.
- 11) たとえばハンス・バロンなどがジャンガレアッツォ戦争の影響のごとく見なしているルネサンス的合理的精神も、『デカメロン』が現れた当時すでにフィレンツェ市民の間に幅広く認められたのではないだろうか。
- 12) ドメニコ・コンパレッティ(1835-1927)の *Virgilio nel Medioevo* (1872)によると、ウェルギリウスは、中世では魔術師や予言者として崇拝されていたという。
- 13) セルカンビは、グリムやペローよりもずっと早い、ストラパローラやバジールよりも先に民話を記録していた。また彼は犯罪記録や推理小説の先駆者でもあった。
- 14) 第一章注1)の第三論文「額縁に……」参照。
- 15) *Encyclopedia*, op. cit. などによると、文学者としてのサッケッティは本来詩人として活躍していて、ノヴェッラを執筆したのは晩年の10年のことに過ぎない。たとえば『リーメの書』には長短さまざまな詩が310篇収録され、さらに全75節からなる『美女たちの合戦』が残されていて、ウテット版など

『デカメロン』の遺産=14世紀後半から15世紀初頭の……

様々な版で刊行されている。

- 16) Di Francia, *Novellistica*, op. cit., p. 229 によると、セルカンビは『デカメロン』の21篇を剽窃して、24篇の作品を書いているという。
- 17) 15世紀のシエナ人 Gentile Sermini は強烈なカンパニリズモの信奉者であった。
- 18) Gentile Sermini, *NOVELLE*, A cura di Giuseppe Vettori, Perugia 1968, avanzini e torraca editori.
- 19) Ibid. Vol. I, p. 273. 第十二話の冒頭で記されている。
- 20) 一応セルミーニ→マズッチョ→ルイジ・ダ・ポルト→バンデッロ→シェークスピアの系譜がたどられているが、セルミーニ→マズッチョのつながりには疑問の余地がある。
- 21) 古代地中海の周辺では、エジプトのイシス、シリアのアスタルテ、フリュギアのキュベレ、ギリシャのアルテミスやデメテル、ローマのケレスなど、さまざまな女神がいずれも穀物や豊饒や生殖の神として祭られていた。
- 22) カトリック教会では、聖処女マリアは独特かつ熱烈な信仰の対象となっている。

**On the Heritages of the ‘Decameron’:
‘Cornice’, ‘Within the Realm of the Believable’,
‘Eros’**

Yoshiaki YONEYAMA

As I showed in my previous three papers, though the *Novellino* had been an excellent forerunner of the Italian novellas, only with the appearance of the *Decameron* was the basis for the Italian novella truly founded. Almost all the elements of the novella can be considered as heritages of the *Decameron* but, referring to the definitions of the novella form, I selected firstly the adoption of the ‘cornice’ or framework device, secondly the setting within the realm of the believable, and thirdly the audacious expression of Eros and of sexual relations. In this paper I focus on the *Pecorone* of Ser Giovanni Fiorentino, the *Trecentonovelle* of Franco Sacchetti, and the *Novelliere* of Giovanni Sercambi, all of which were included by Di Francia in his *Novellistica* as epigones of Boccaccio.

I find that these three works imitated Boccaccio’s cornice device to various extents. I also find a remarkable increase of settings within the realm of the believable by the three authors compared to works published before the *Decameron*, and a similar increase in the percentage of novellas in which sexual relations take place. From the high number of incidences in the *Novelliere*, in particular (49.68%), we can imagine how the people of Tuscany, where the tradition of Dante and Petrarch had forbidden them to see women in sexual terms, must have welcomed the appearance of the *Decameron* as the liberator of Eros.